TAINTED GRAIL
THE FALL OF AVALON
テインテッド・グレイル：アヴァロンの崩壊

アヴァロン見聞録
ALMANAC OF AVALON

アヴァロン紀行

東部

カマアロの都邑（パラ）

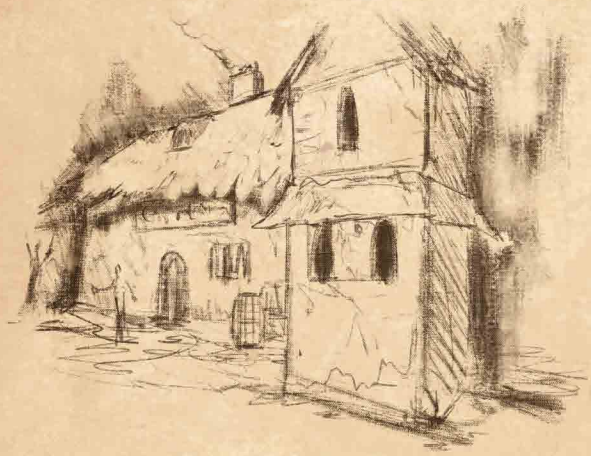
その庇護を求め、長年にわたってカマアロ城下には、島じゅうから人々が逃げこんできた。けれど見いだせたのは、膨れあがった集落の悪臭のみ。

あやつらが皆を、カマアロに集まるがままにまかせた理由は理解した。されど、我が騎士団には果たすべき責務があるぞ。私には、皆をこのような惨めなありさまで放っておくことなど、できぬ相談よ。

――イウェイン

オオ、都よ！そは臭気と諍いに満ち、ただ財を浪費するのみの地なり。われは思う、これこそ真のカマアロの姿ぞよ！

――オベール



カマアロ

アーサーの御代に建てられし鉄壁の城砦。円卓騎士団の居城。されど現在の城壁は、島のあちこちと同様に崩れている。

見事な城！　少なくとも外目は素晴らしきもの。だが守護者たちは、われを一歩たりとも中に入れてくれなかったぞよ。

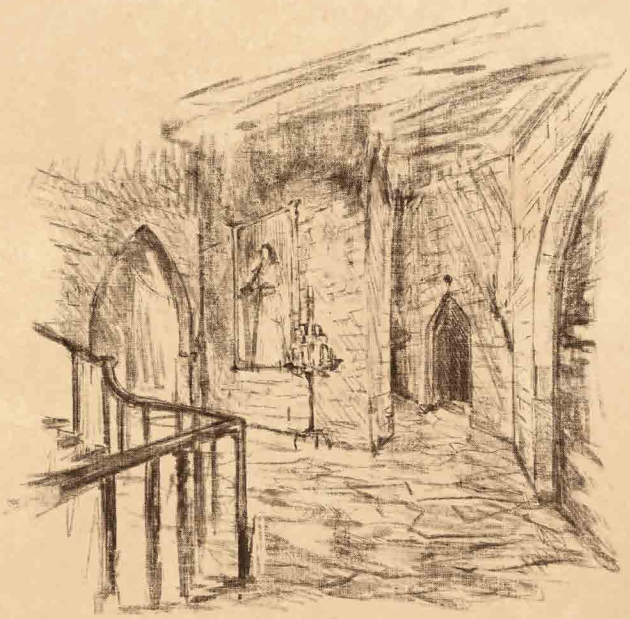
――オベール

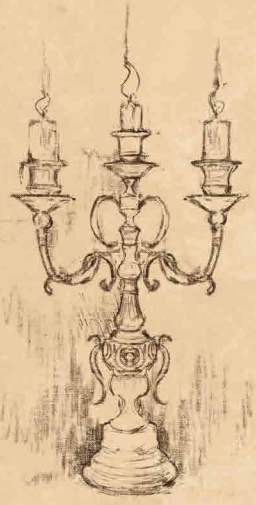
わがままな魔女に弄ばれた傲慢な騎士どもに会いたいか？　ならカマアロに行け。

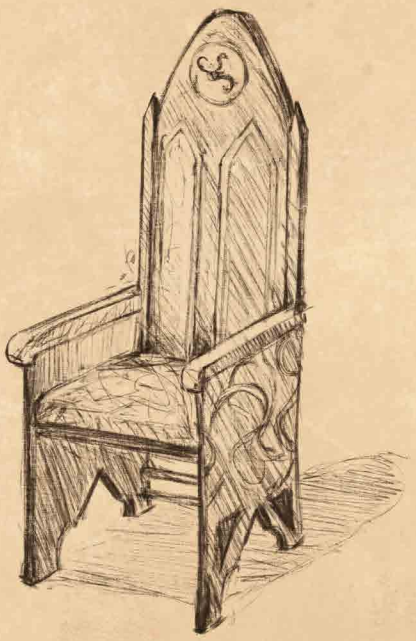
――フェール

この砦に全母の司祭がいないということは、とても哀しいですわ。あたくしたちの宗教の本質は、みなさまの礎になることですのに……。

――ニント







ブロッホ・クルアハ

石塚の円塔

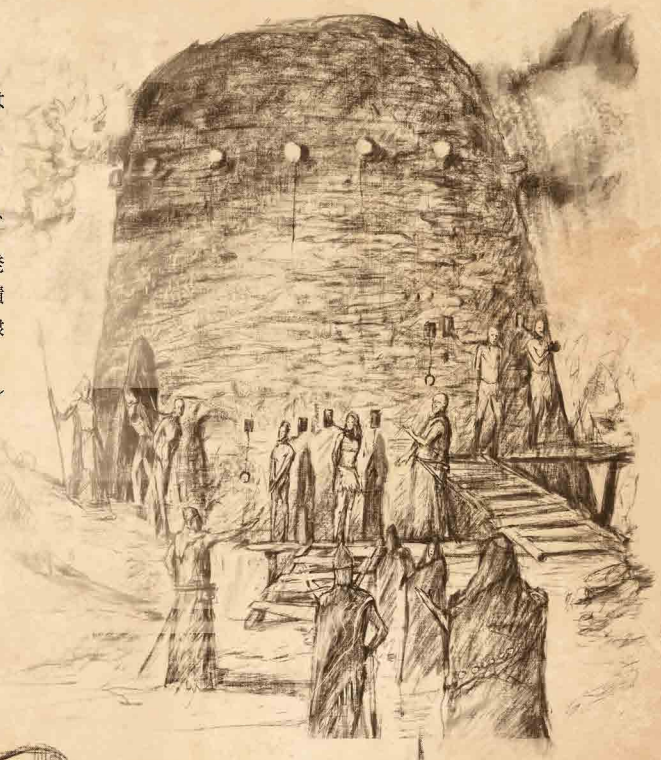
西岸には、厚い防壁の、石造りの円塔（ブロッホ）が点在している。かつての用途は不明だが、現在ではほぼ囚人の収容施設となっている。

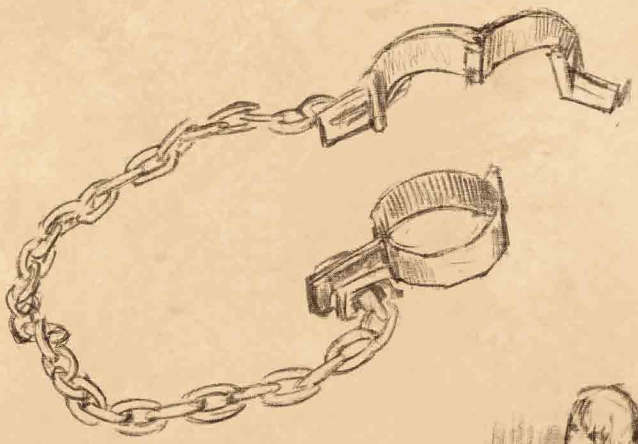
邪悪な奴隷使いたちの居場所ですね……。

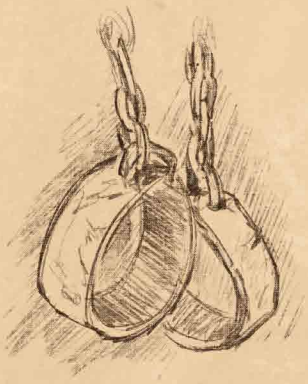
——ニント

アっしは驚いたねえ、ブロッホから1ダースもの鎖が発注だってさ。皆に聞いて回った末に、獣の糞をたんと積んだ荷車を、遣わしてやったぜ。ケッ、汚らわしき奴隷使いめ!

——エルフュル







ブンドルカ

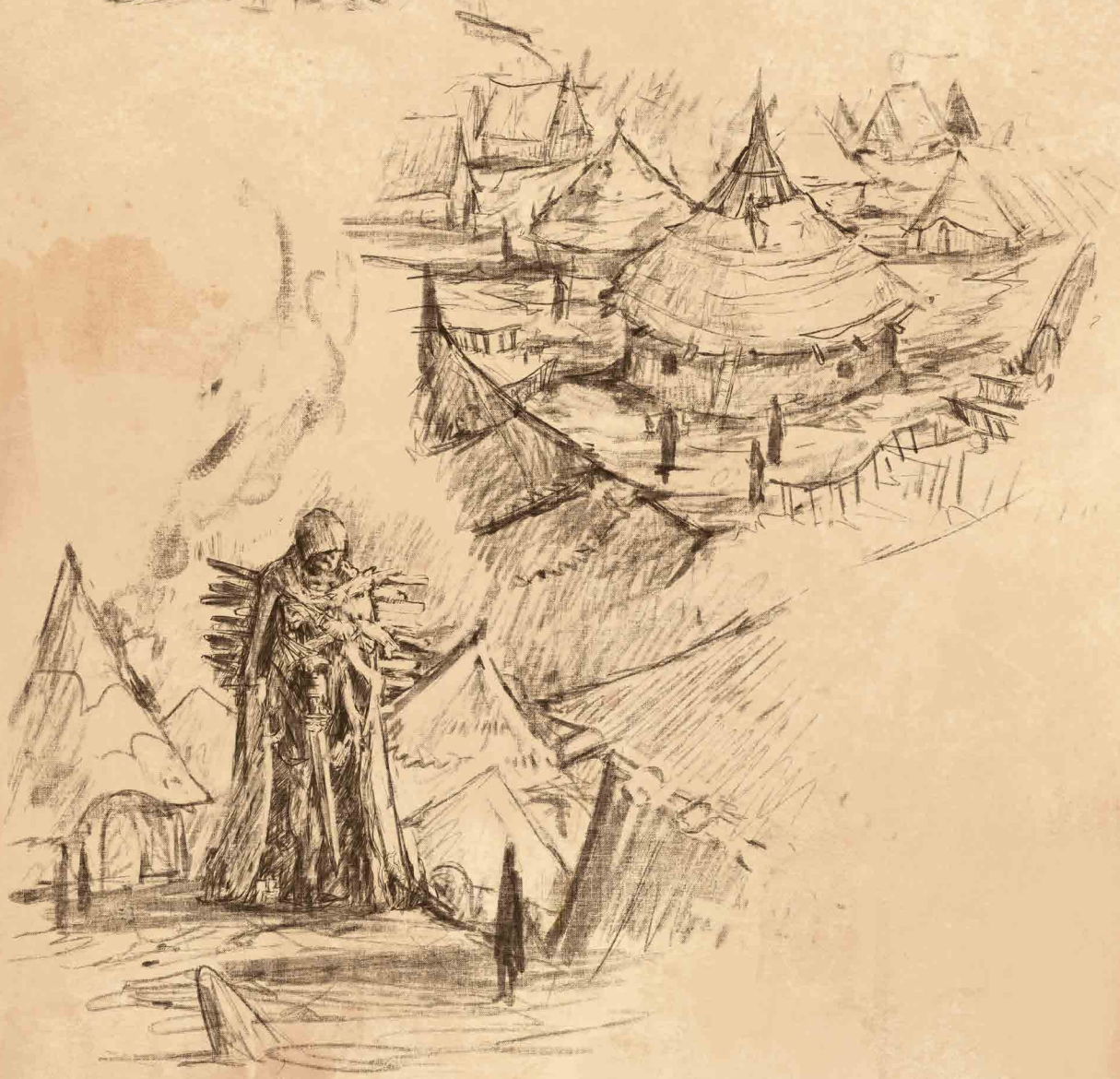
ブンドルカは、隣村と石ぞりでつながっている。一体のメンヒルを共有するというのが、古の契りのひとつなのだ。

十数人の人々が曳くメンヒルとは、寡聞なり。村々の間を移動させているぞよ。

――オベール

人々は陽気で手厚くもてなしてくれますわね……けれど、何か問題があるようです。どこか心の奥底に、汚れたなにものかが、ありますわ。

――ニント



漆黒沼

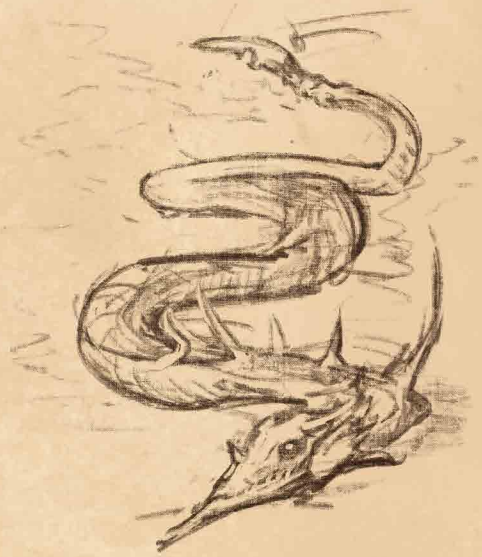
伝説のカマアロの影のなかに鎮座する、全母の修道院の在り処。今や沼底に沈んでいる。

追跡や生存の技術を磨きたい？　あの闇なる沼に行け。

――フェール

住人たちは大げさよ、と思ったなり。だが気がつくと、沼にはまり込んでいたぞよ。

――オベール



はじまりの農砦

アヴァロンの征服者たちによる、最初の農場要砦。そこのメンヒル同様、打ち捨てられて廃墟となっている。

アーサーと従者たちによって拓かれた、かの名高き開拓地を見てやろうと思ったなり。だが見つかったのは通行不能な壁！　粗雑に放置されたメンヒル、そして壊れた水車小屋の狂人ぞよ。

——オベール

ここの壁は、本土でも最高のウデの石工が造ったものだぁな。失われて久しい技術さ。いつか行って学びたいものだねェ。

——エルフェル

ささやきの森

奥深く迷いこむと、木々の合間に奇妙な影を目にし、かすかにこだまする音楽を耳にする。

この恐ろしい常秋の地で、春や夏のかけらを探したければ、緑なす樹木の下で休むのがいいと思いますわ。皆はこわがりますが、あたしには心安らげる場所なのです。

——ニント

最良の鹿肉が欲しいか。ここは狩りにはもってこいだ。

——フェール

輝ける干潟

カマアロの影のなかの長浜。砂上の木々の浅瀬が水で満たされ、陽光の下で輝く。古文書の神秘文字のように。

アヴァロンからは、麗しき景物はほぼなくなったなり。されどここは、わずかに残る、その一つぞよ。

——オベール

あそこにいたとき、あたくしも魅了されたかったのですわ……けれどあたくしの中の何かが、いつも恐怖に叫んでいたのです。

——ニント

巨神（タイタン）の階段

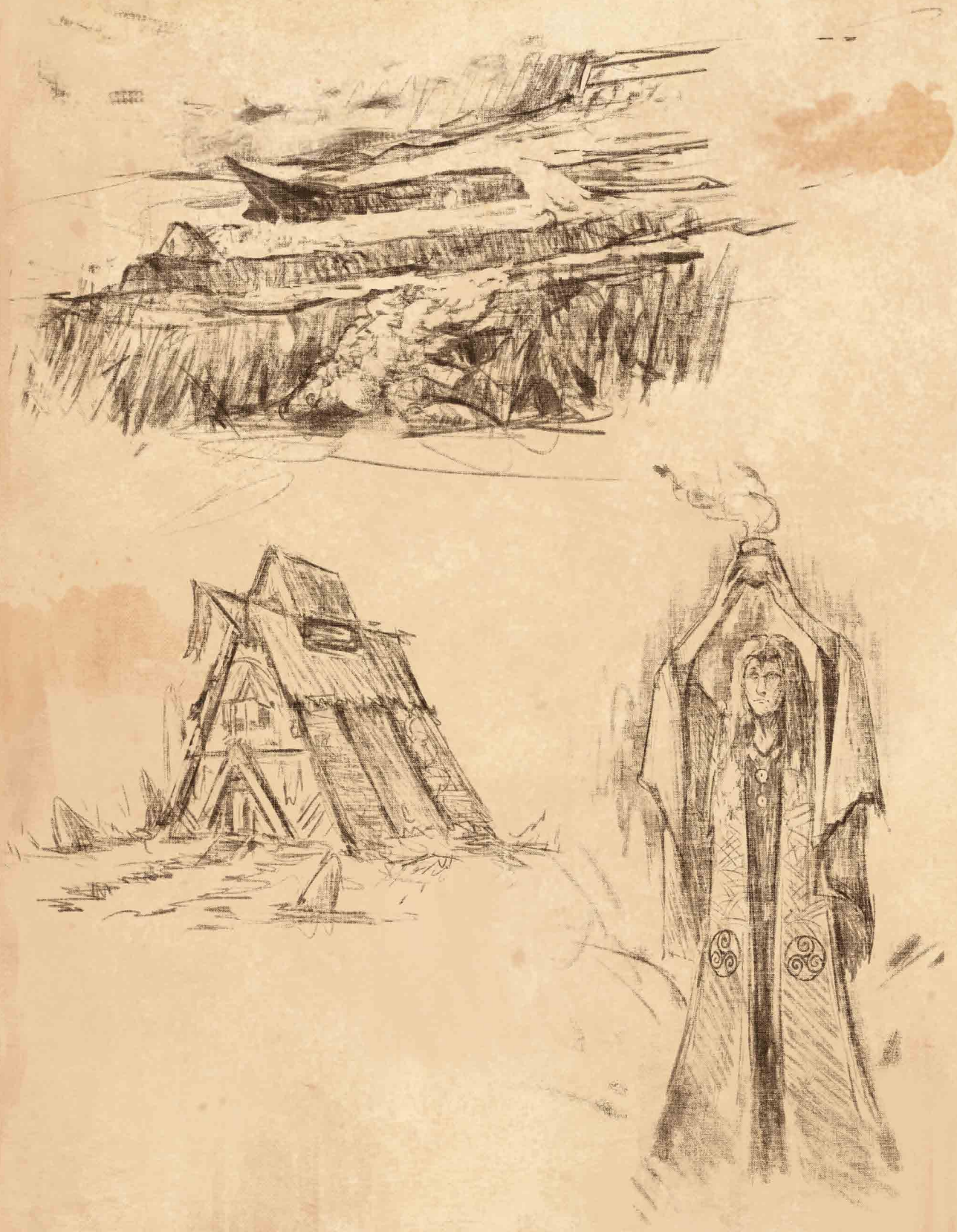
カマアロに向かう巡礼たちには「いずれかの崖の下に岩を残す」という習慣があった。今では玉石の坂道となり、より速く進むことができる……より安全にではない。

つらい登りのあとでは、小さな神殿も素晴らしき憩いと祈りの場所となりますことよ……全母へのささやかなる供物も必要になりますかと。

——ニント

この階段は、高所の守りを固めるのに適している。カマアロという場所は、緻密に計算されているのだな。

——イウェイン



騎士団の墓所

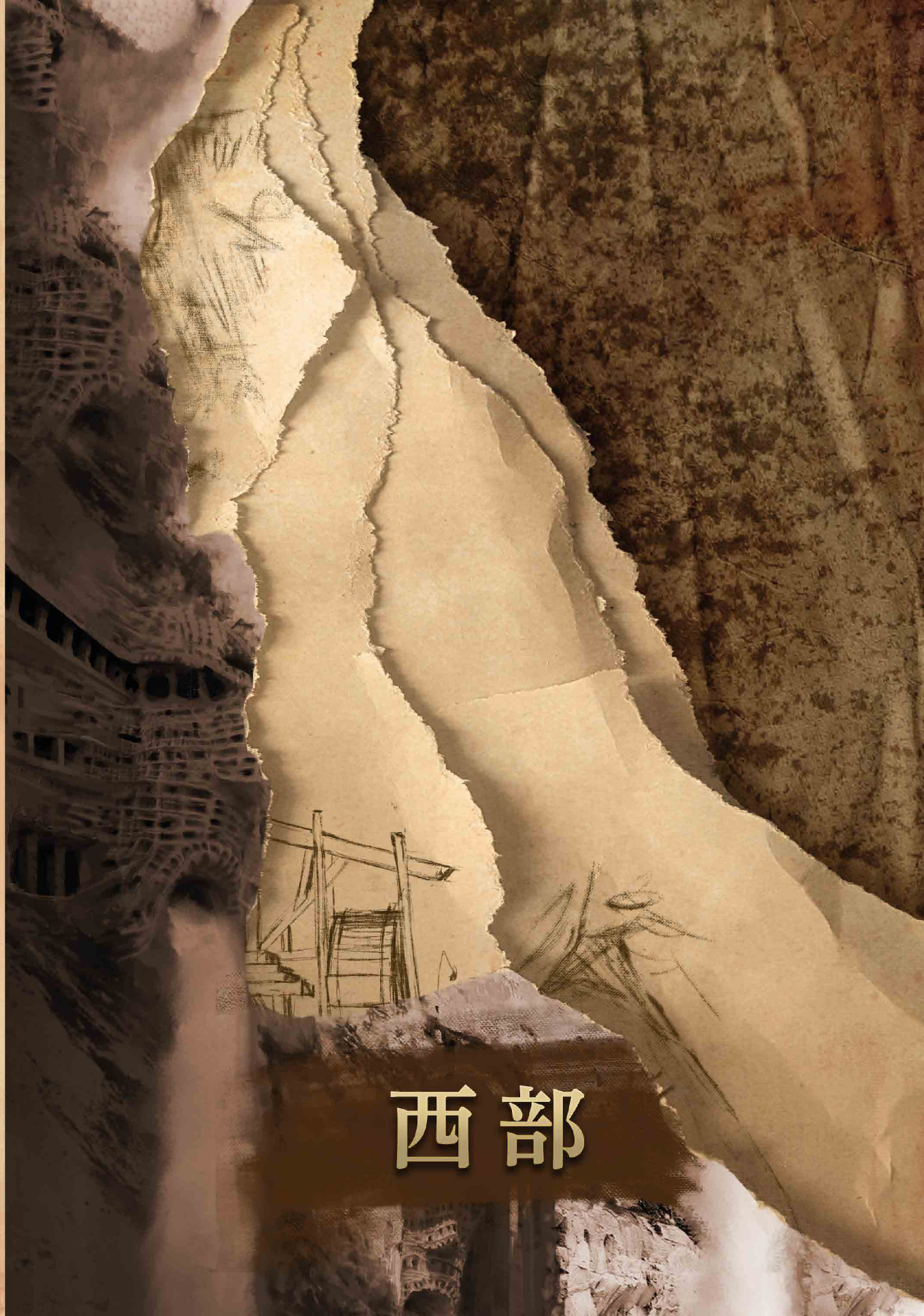
アーサーならびに麾下の騎士たちが眠る至聖所。

印象的な、上からの眺めなり。参道を下り、見上げた景色は、言葉も出ないぞよ。

——オベール

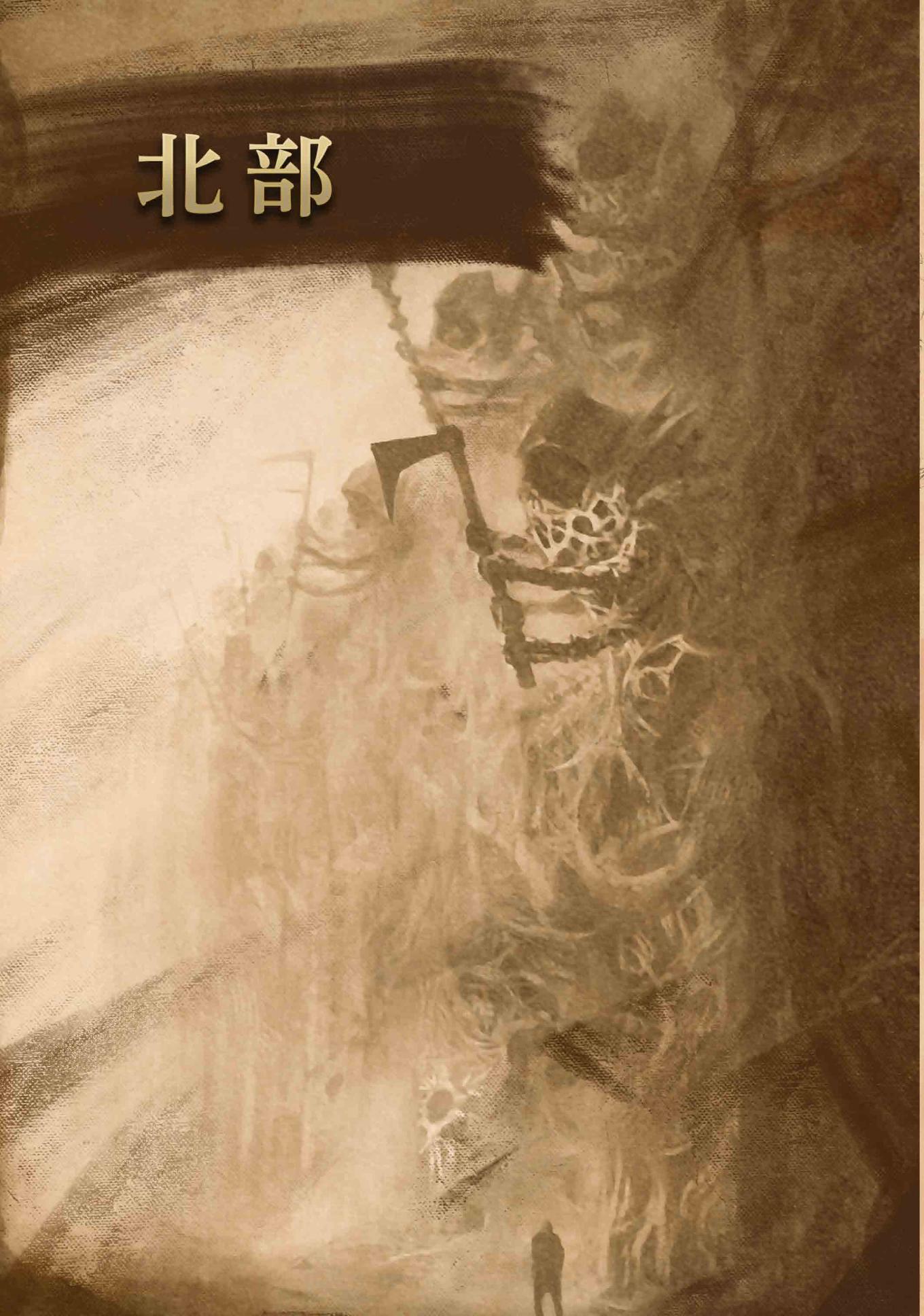
美麗な場所に、醜悪に腐った鼻持ちならんやつらの取り合わせか。生者を住まわせたほうがマシだろ。

——フェール



西部

北部



からすのねぐら（クロウズ・ネスト）

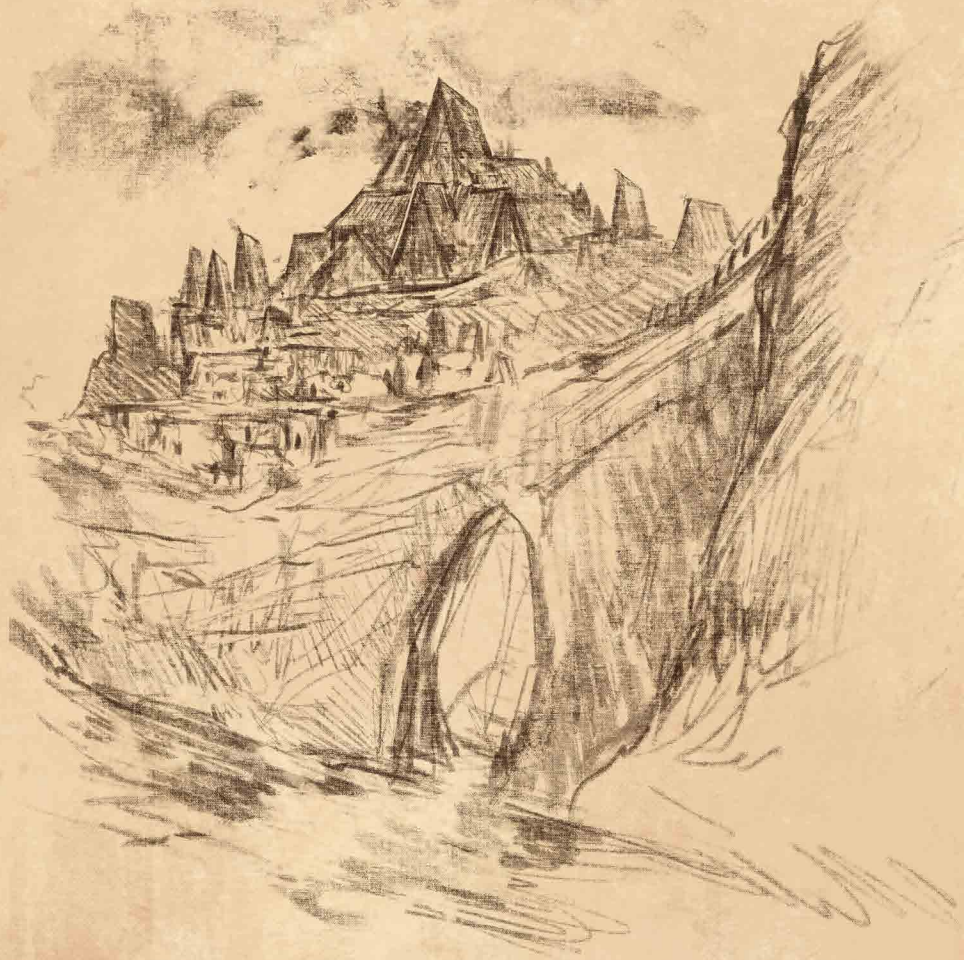
アヴァロンでも最大の集落のひとつ。モリガンの子らが、石のアーチの根元深くに穿たれた石の穴倉に棲んでおり、そこから上方に市街が広がっている。

ただ独りの騎士に率いられた、真の戦士集団。

——イウェイン

異なる宗教の人たち。血を好むモリガンは、女神の名には相応しくないと思いますけど……彼らは闇の術に通じているのですね。申し訳ないですが、心が落ち着きません。

——ニント



ファルフアル

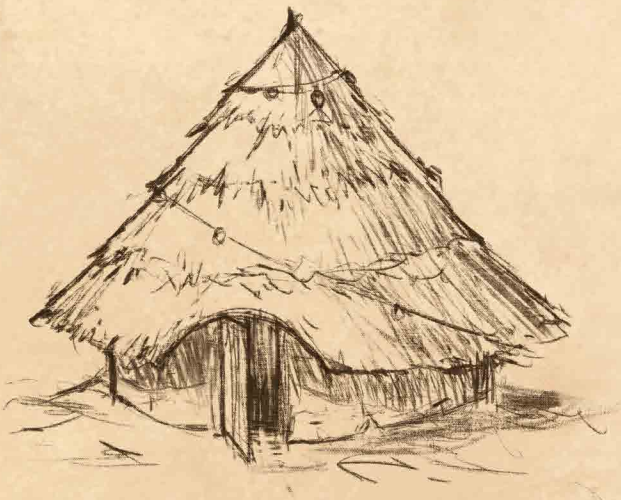
混沌に満ち、常に乳の腐敗臭が漂うこの集落は、強いアルコール飲料で名が知られている。

あたりは臭い山羊や羊だらけなり。されど肉は腹を満たし、乳には癒されるぞよ。

——オベール

スゲエ農民たちだゼ。気風はいいし、必要なら戦う覚悟もある。とはいえ、デタラメな建築技術と、適当な建物には感心しないねェ。

——エルフュル



最果て岬（ファーポイント）

見事な断崖絶壁の頂上に危なっかしく佇む奇怪な廃墟。アーサーの斥候が、島の調査をするより前から、存在していた。

傑作ナリ！　カモメの糞に覆われた、巨大な何層もの石積みぞよ。

――オベール

アっしは前に学んだことがある。唯一無二と言える、アヴァロンにふたつとない建造物さぁ。

――エルフュル

羊歯（シダ）の海

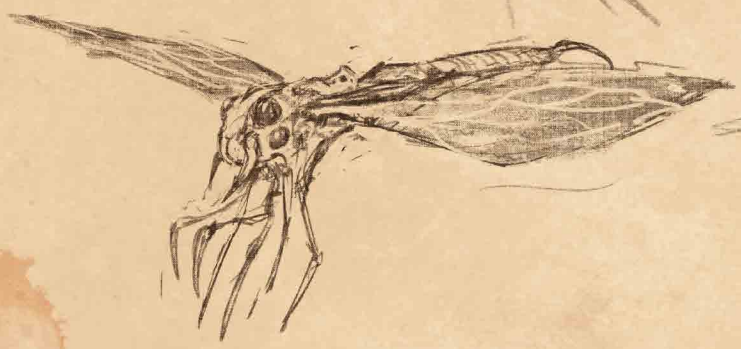
羊歯の下生えに厚く覆われている美しく危険なこの地は、不用意な旅人にとっては災いとなる。

われも、馬も、足をくじいたなり。馬は殺すしかなかったぞよ。

——オベール

訓練中、羊歯の海にある洞窟に放りとまれた。生き延びたが、今でもその恐怖を思い出す。

——フェール



島のへそ（ハーフウェイ）

何世紀ものあいだ、商人や反目し合う一族らが集い、交易や問題点の調整をしてきた。いかなる犯罪も業績も忘れられることのないよう、村の中心には巨大な遺恨碑（グラッジストーン）が鎮座している。

戦にも不和にも汚されぬ、アヴァロンの中心地。この場所は常にそうだったのだ。

――イウェイン

何でも手に入るなり。傭兵、武器、食料、詐欺師たちすらも。あそこでは、いろんな仕事をしたぞよ。

――オベール

ロングバロー
長塚

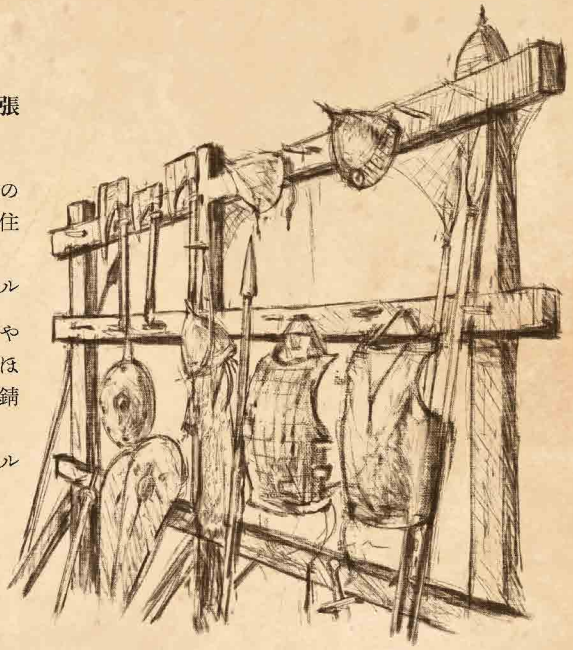
トゥアハンの広い河口では、いにしえより、塔が見張りの役目をはたしている。

ここにいる兵士たちは、過去の遺物なり。先住者の話が正しくとも、いわゆるここの“衛兵”たちは、先住者について何かできたのか?

——オベール

この物見の塔にはねェ、数えきれないほどの武器や防具が仕舞われているのさぁ。残念だがねェ、そのほとんどは何世紀ものあいだ日の目を見ず、ゆっくりと錆びついていくのさ。

——エルフェル



ムーンリング
月の輪

大ドルイドの御座。深淵なる知恵を授かるか……みずから神々への捧げものとなるか。

巨石が飛び、ドルイドは死の魔法を使ったって？行くかよ、そんな場所。

――フェール

あたくしは行ってみたく思いますが、とあるバンドゥルイ（女ドルイド）にやさしく止められたのですよ。その翌週、別の全母の司祭が、おぞましいドルイドの儀式で、生贄として捧げられたと耳にしましたわ。

――ニント

セレーネ・ヴィザージュ

月女神のかんばせ

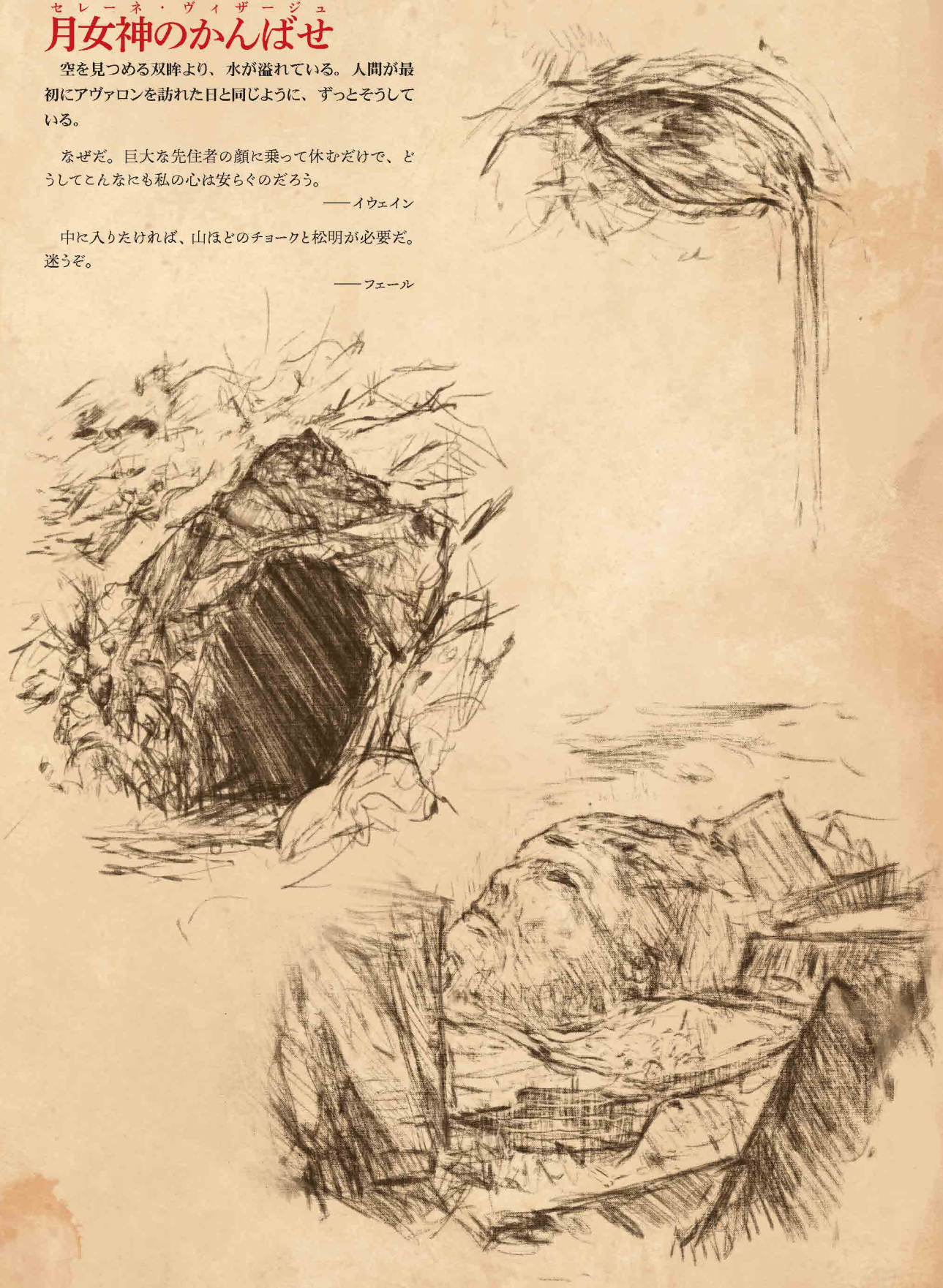
空を見つめる双眸より、水が溢れている。人間が最初にアヴァロンを訪れた日と同じように、ずっとそうしている。

なぜだ。巨大な先住者の顔に乗って休むだけで、どうしてこんなにも私の心は安らぐのだろう。

——イウェイン

中に入りたければ、山ほどのチョークと松明が必要だ。迷うぞ。

——フェール



ティンバーウォール
館の長城

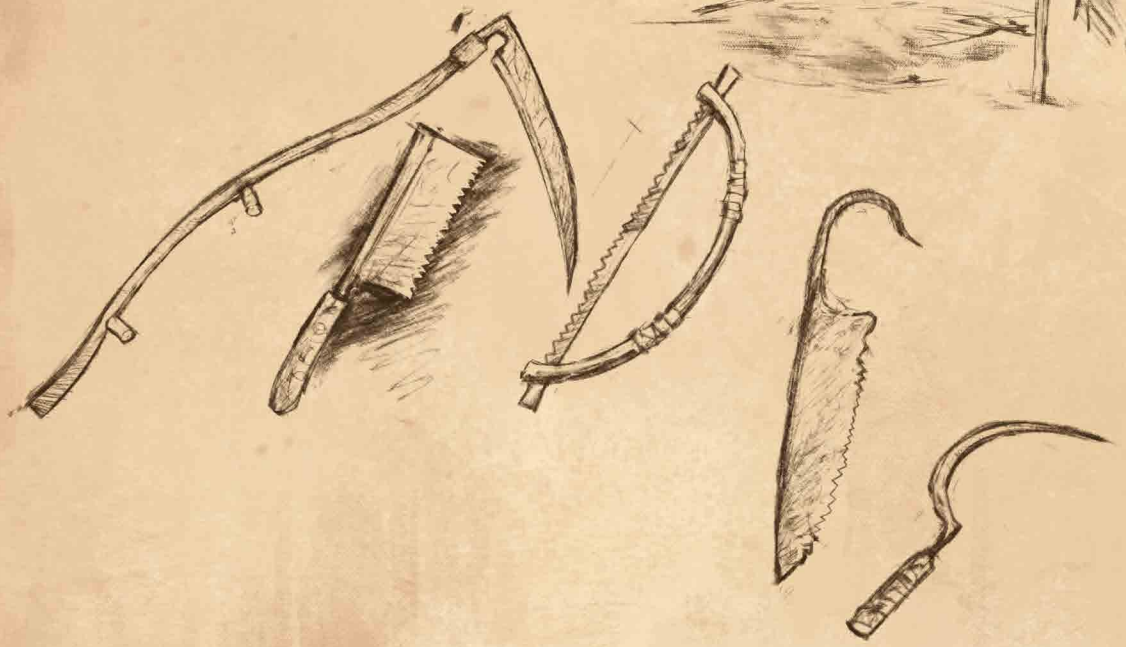
後背地に通過不能の先住者の砦を擁するティンバーウォールは天高くそびえ、何マイルも先から、その威容を目にすることができる。住民もまた、この街に似ている。機を見るに敏で、誇り高く、暴力に満ちた世界で常に上手を取ろうとする。

ウルタン王とキンケイド妃の婚礼に出席したなり。とても幸せそうだったぞよ。われが飲みすぎたせいなのかもしれないけれど、あんなに素晴らしい祝宴は、人生で一度きりぞよ。

――オベール

ティンバーウォールはアヴァロンで一番、重要な街だ。通商路の要であり、難攻不落である。

――イウェイン



守護者の谷

谷の入口付近の岸辺に小さな町がある。谷に立ち並ぶ巨像と比べると、本当に卑小に見える。

守護者の谷など、行ったことはないなり。眺めただけで、骨の髄まで震えが走ったぞよ。この道を行くことがないよう、ひたすら願ったなり。

――オベール

円卓騎士団が、立ち入るなと警告しただろ？　彼らも入ったことはない。どうして入っちゃいけないか、その理由も忘れられた。

――フェール

トゥアハンの長城

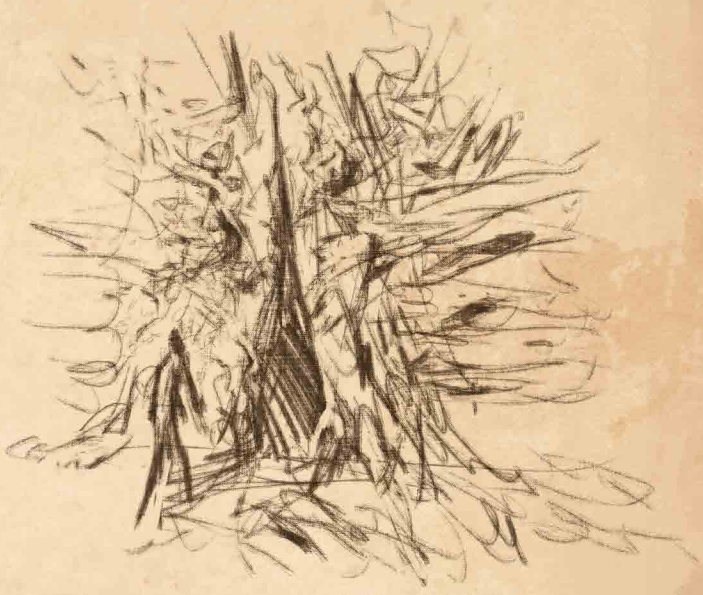
没落後六百年、先住者の首都たるトゥアハンの長城は、いまだに島を二分し続けている。

おんや、こりゃまったく判別不能だねェ……地平線の一部になっとるさ。

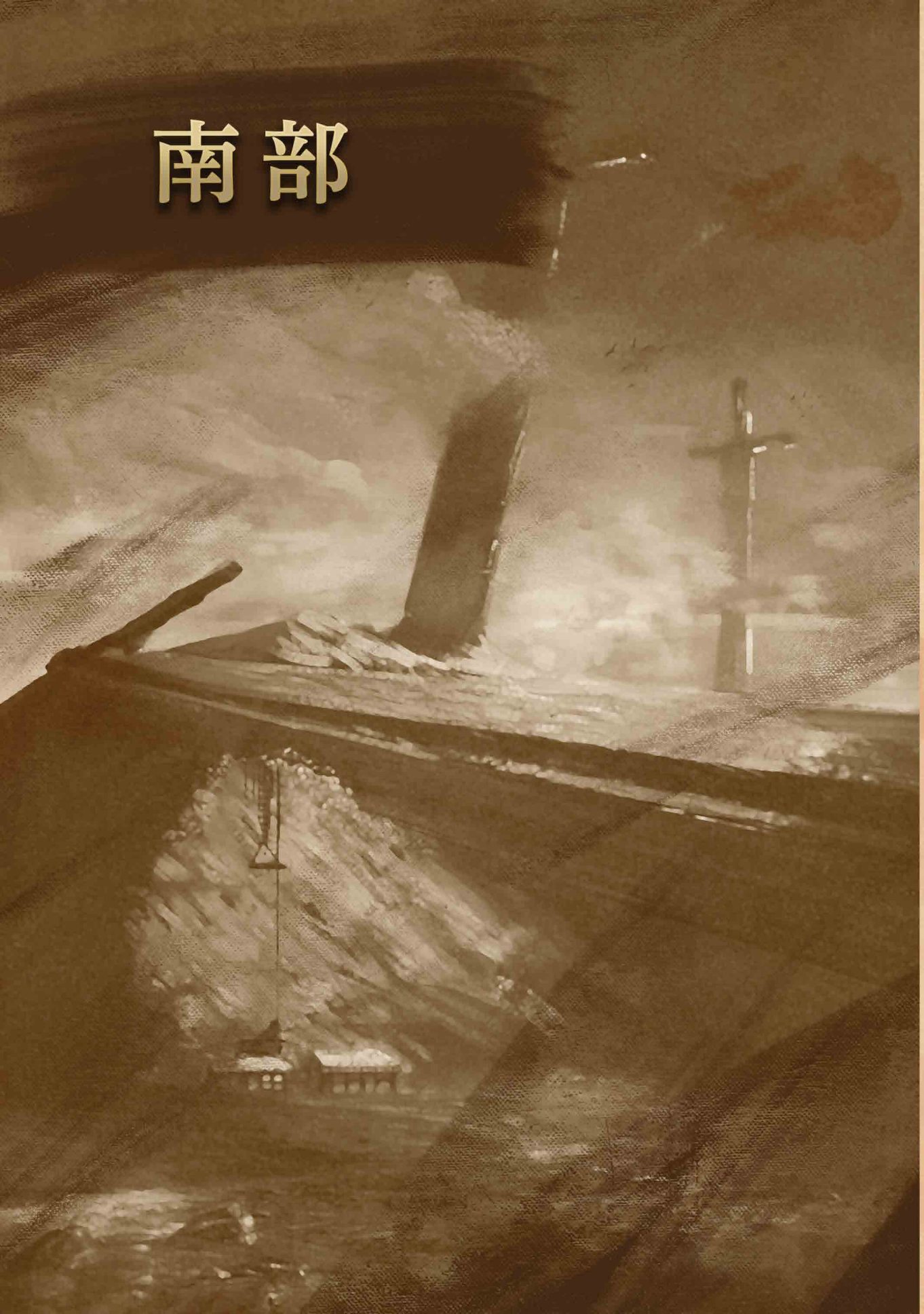
――エルフュル

人は妖石を恐れる。だが動物は恐れない。だから長城のふもとは、とてもいい狩場になっている。

――フェール



南部



すすけた秘儀（コンクラーヴェ）の地

かつてこの荒涼とした高地の風は、花々と塩の香りがしたものだ。今では焼けた人肉のにおいまで運んでくる……虐殺の名残だ。

今でも炎にまかれたドルイドの悲鳴と泣き声が耳から離れません……我らは情のない、悪者ですのに……。

――ニント

ここで起きたことは残酷だが、必然ともいえる。民草には責めを負わせるべき敵が必要だった。そしてドルイドの勢力は、あまりにも強大になりすぎたのだ。

――イウェイン

クーナハト

この集落は、滅多に地図にも記入されない。唯一特筆すべきは、村の広場にあるメンヒルだけだ。

このような場所、知ってるものは少数なり。けだしわれは、ここで真の勇者たちに出逢ったぞよ。

——オベール

アっしがここに住んだのは、近くに大剣ヶ原と塚があったからさぁ。今になっては、そんなもンなくてもここに住み続けたいがねェ。イウェインやニントのような善良な人間がいるし、若者たちも有望さ。終の棲家として悪くないさ。

——エルフュル

舟破れ浜（ふなや）

これらの船は、かつて人々をアヴァロンに乗せて来たのだと伝えられている。今やここで静かに眠っている……大破し朽ち果てて。

哀しい光景ですわ。大いなる昔、人々は希望を胸にこの湾に上陸しました。けれど出迎えたのは、あやかしが跳梁跋扈する、絶望のアヴァロンだったのです……。

――ニント

感動すべき眺めだろう。人はどんな障害でも乗り越えられるという証明だ。たとえ本土が疫病で一掃されていたにせよ!

――イウェイン

果ての庄（ファーシャイア）

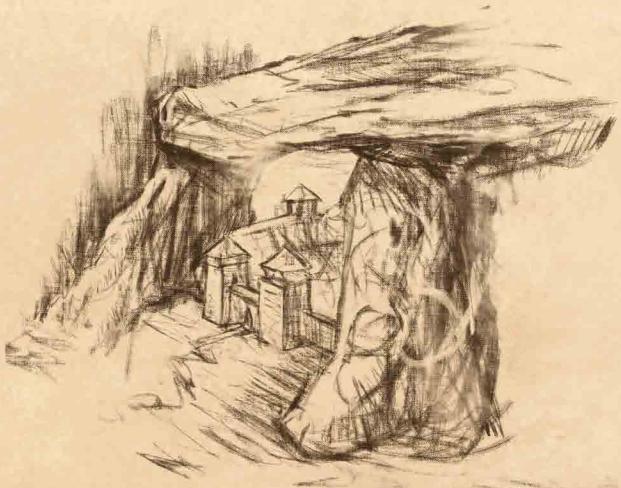
果ての庄は、不安定な庇岩によって、日光や雨から守られている。

ここの人たちは、視覚障害があるか、狂気に侵されているかのどちらかなり。以前いたときは、岩壁がいつ崩壊するのか、肝を冷やしていたぞよ。

——オベール

キンケイドの奥方は、知恵深く誇り高き女性だ。だが心せよ。家門を守るためなら、あらゆる手を尽くすだろう。

——イウェイン



先住者の塚

財宝探しどもは、非人類の骨と忘れられし財宝を見つけるべく、古代種族の塚に挑む。残念ながらその多くは、地下深くをうろつく狂気と恐怖に遭遇するだけで終わるのだ。

アっしはいつも、塚の商人から貴金属の塊を確保してたンでさぁ。ただねぇ、それを得るために行方をくらました連中については、あンまり考えないようにしてましたねェ。

——エルフュル

しっかり聞くなり。ここに戻ってくるたび、あやかしどもの影がより濃くなっているなり。ほどなくやつらは、この塚を接収してしまうぞよ。

——オベール

大剣ケ原（たち）

みずからの終焉を悟り、先住者たちは巨人を送りこんで、人間を海の向こうへと押し戻そうとした。しかし巨人どもは、ここで武器を捨てたのである。

最初にこれらの剣を目にしたとき、言葉を失ったなり。そして悟ったなり。巨人の背丈は木々ほどであり、山ほどではないと。さもなければ、単なる記念碑かもしれないぞよ。

——オベール

これらの剣は、この呪われし島の奇怪な軍勢に対する、人類の勝利の象徴だ。クーナハトの民は、これらをいつでも目にできるとは、幸運の極みであろう。

——イウェイン

グラブウッド

ある者は、この森が厳しい時代に開拓者に食物（グラブ）を与えてくれたからだと言い、またある者は、倒木を這う芋虫（グラブ）のせいだという。

グラブウッドの薬草を、別の環境のよい場所で栽培しようとしたのですが、瞬く間に枯れてしまいました。グラブウッドの土壌にしかない、何らかの成分が必要なのかもしれませんわね。

——ニント

南の双角

いにしえの海洋民が、この島に来るための目印とした灯台。

古い法、伝統。それらに縛られた灯台守。無駄な人生だ。船など導かないのに、火の管理か。同情するよ。円卓にも。

――フェール

狩人の杜（もり）

かつてはドルイドしか立ち入りを許されていなかった……今ではその理由も忘れ去られた。

あたくしの同胞は、このひどい教団に対処すべく力を尽くしましたが、それは危険かつ無駄なことだと証明されたのでした。

――ニント

あたりの村には〈鹿の父〉と呼ばれる、印象的かつ不気味な巨大な頭蓋骨があるなり。ここで一夜を過ごすのは、お勧めできないぞえ。

――オベール

流され島

この島は、アヴァロンで初めて人間が訪れた場所だった。今や病める者が最後にたどり着く場所となっている。

どうしようもなく、必要なことなのです。みなさま、ここの修道士がきらいなようですが、かれらはアヴァロンの人々を赤死病から解放するため、犠牲を払っているということを、理解していないのですわ……。

——ニント

湖畔の谷間

水鏡湖に向かって、うるわしき草原が下り坂になっている。重要な通商路を中間地点で分断している。

谷間を囲む奇妙な柱については、何の記録もないぞよ。

——オベール

この地の静けさはありがたいが、長くは続くまい。やがて内戦が始まり、南と北から押し寄せた軍勢は、まさしくこの地点で激突するだろう。

——イウェイン

水鏡湖（みかがみこ）

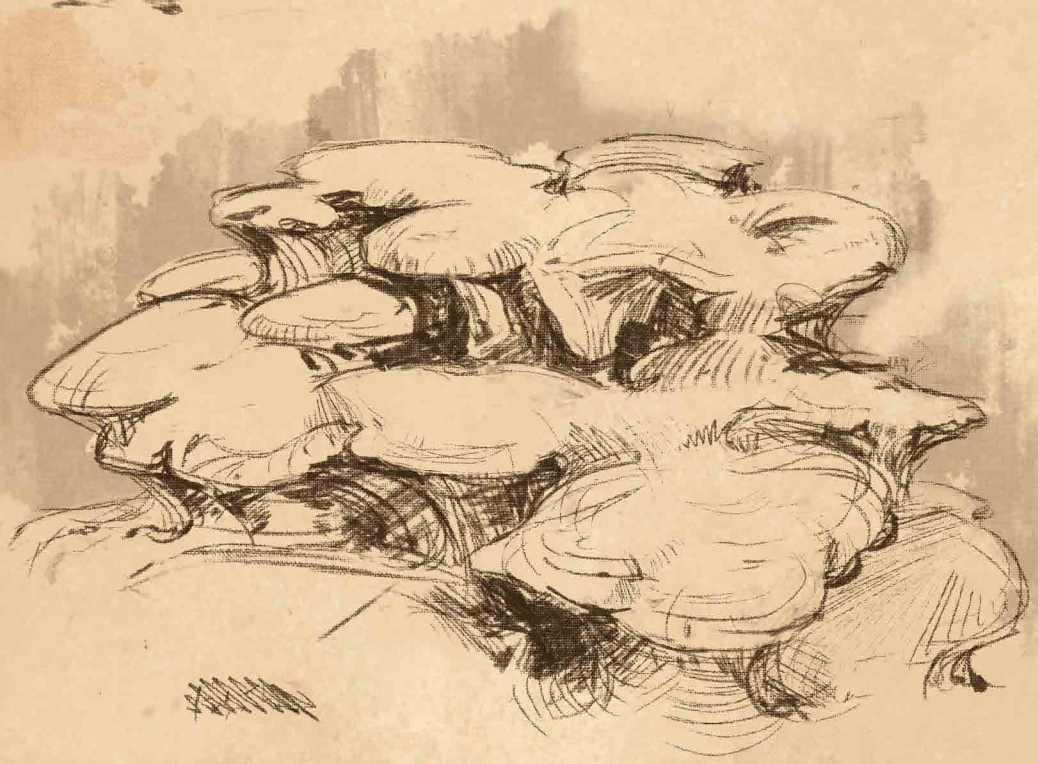
大地に落下した天空の欠片によって形成されたという話だ。巡礼は湖畔で休息をとり、心を清める。

辛抱づよく待ち続けろ。ならば水面下に、湖の貴婦人の顔が現れると聞いた。だが実際には……信じるな。かわりに、信じられないぐらい大きな猪なら、よく水を飲みに来るよ。

――フェール

旅に出るたび、われは計画する。それはここでの休息なり。

――オベール



刻印の地（スタンピード）

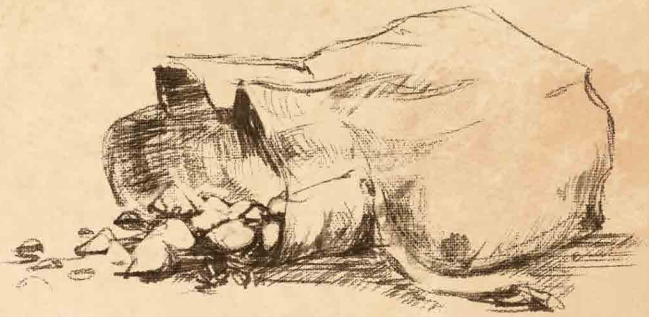
この広大な平地は、かつては神々を讃えるために使われていた。マーリンみずから指導し、白亜の石灰岩をくまなく覆う泥を掘って除去させ、上空よりのみ見える聖なる印を描かせたのだ。

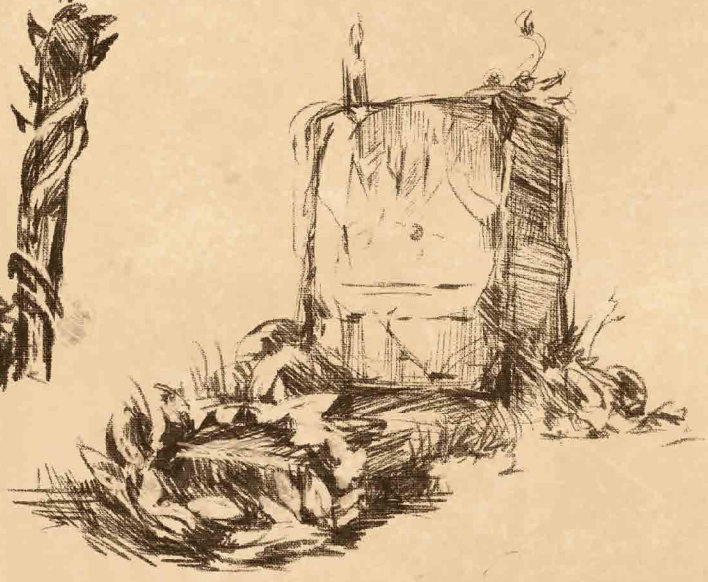
こんなオカシな事業に、何年の歳月と、どれだけの人足が費やされたのかねェ。ひどく印象的だがねェ、でもさ、その必要があったんかい？

——エルフュル

神々との交信のために造られた、そうウワサされています。真の信仰には、このようなものは必要ないのですが……。よき祈りと導く者さえ、ありさえすれば、ですわ。

——ニント



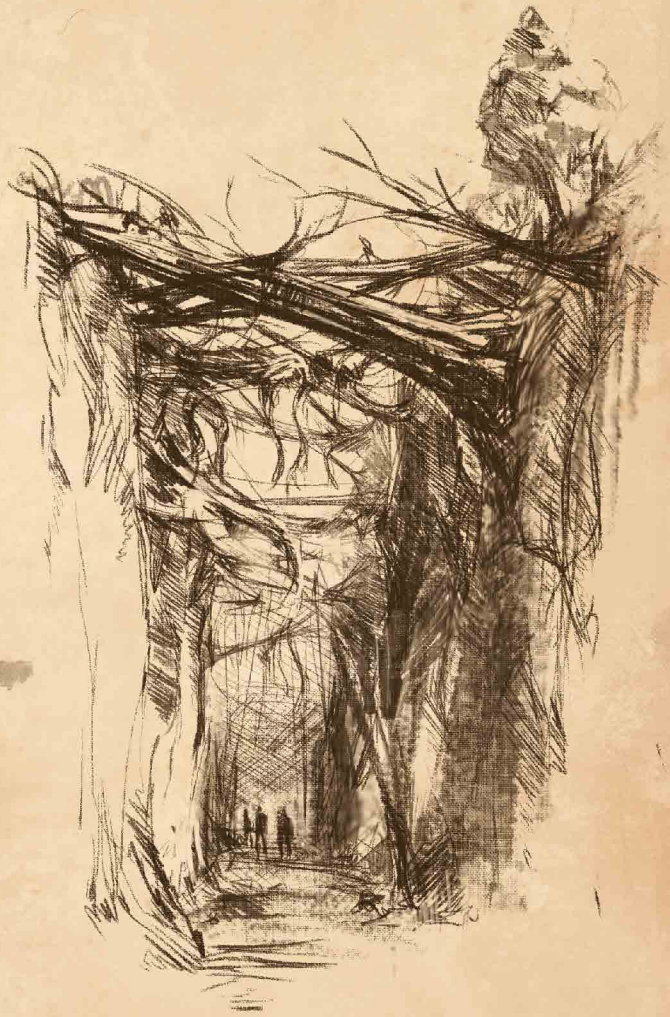


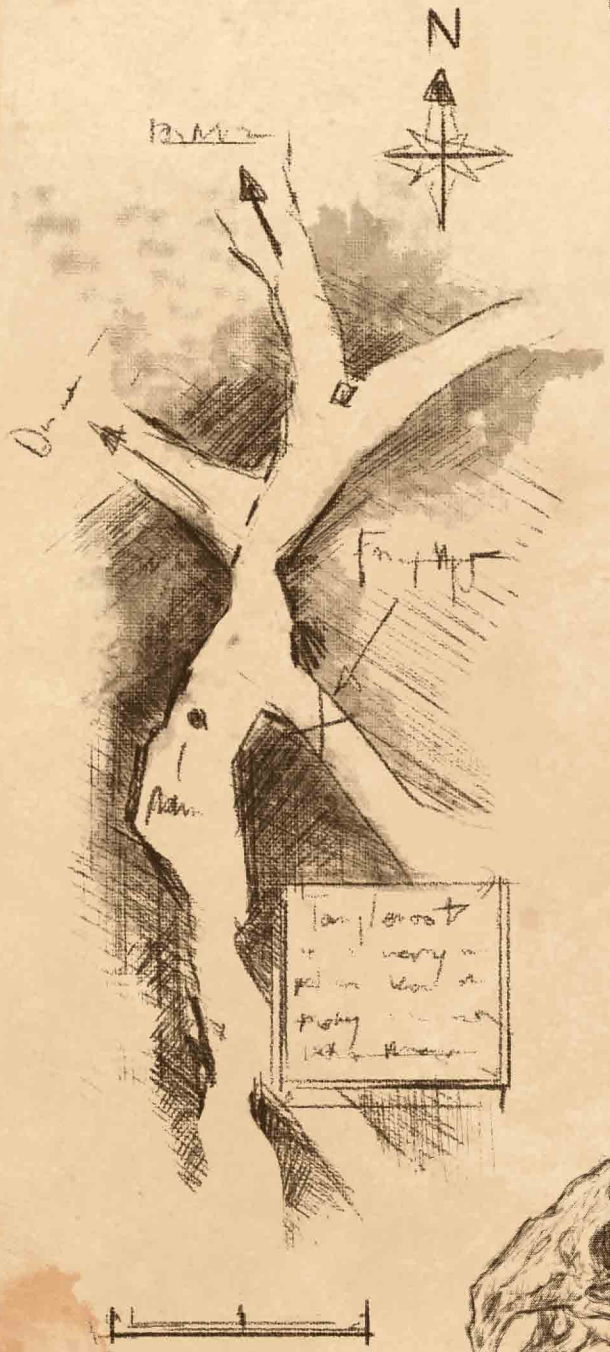
捻じれ根の森

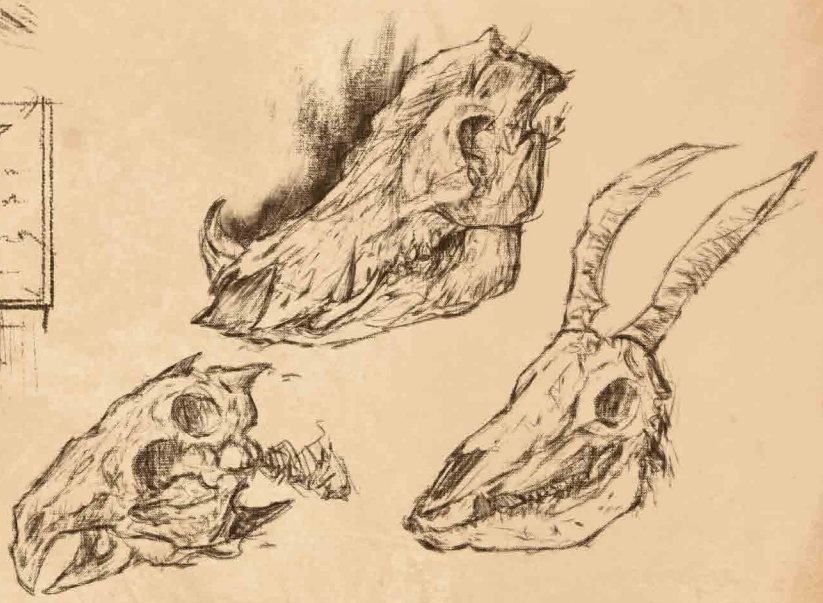
何年ものあいだ、この繁りすぎた渓谷を何人もの旅人が通り抜けた。それによって踏み分け道ができるものと期待されていたが、今だに迷いやすい迷宮のままだ。

この森なら、カマアロの城壁の上から見える。こんな危険な場所を進む旅人を、騎士たちは守ろうともしない。

――フェール





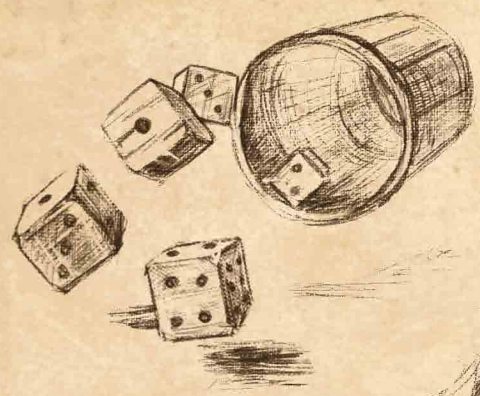


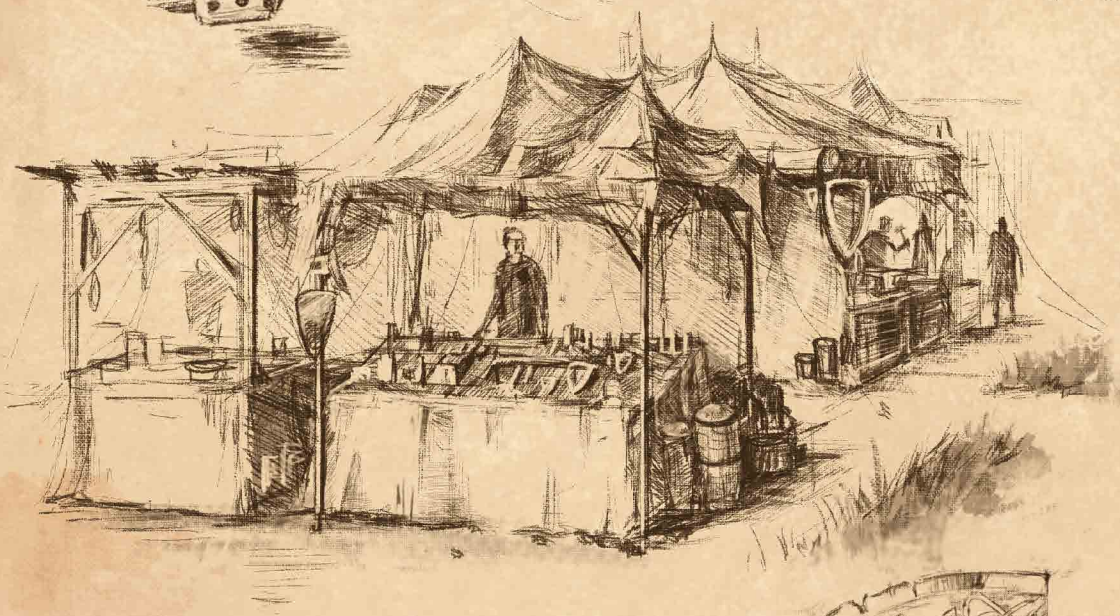
戦士の祝祭地

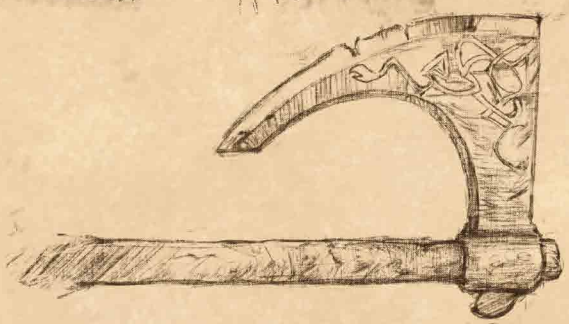
この平原は、年に一度だけ街になる。鍛冶屋は剣を売り、人々は買い物と賭博に走る。戦士と治療師には、自分たちの力を一度ならず見せつける、いい機会となる。

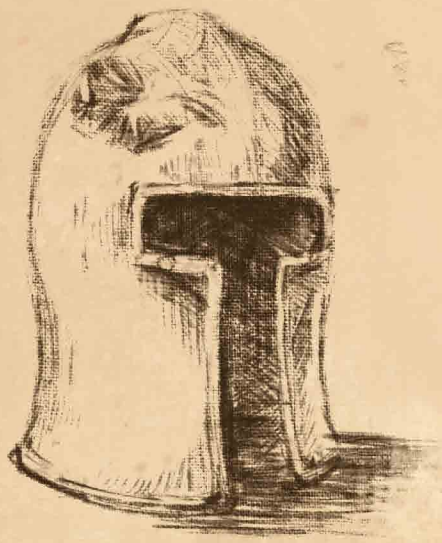
若く知恵もなかった頃、この祝祭に参加したなり。目を覚ましたのは二週間後。地元の治療師に、たんまり借金をこさえていたぞよ。

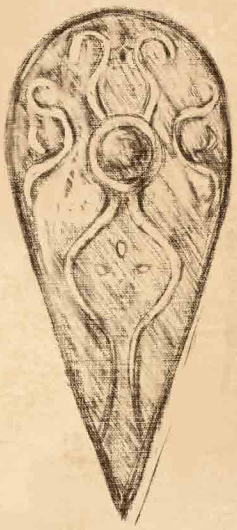
――オベール

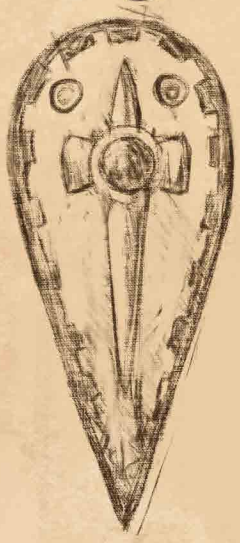












ホワイトニング
漂白の地

かつてここには別の名があり、市場が栄えていた。今では訪れる者などいない。

この村の人たちのために、あたくしたち、数々の薬を調合しました。何週間も祈り続けました。それでも病気は癒えず、栄養も足りておらず、ひどい状態なのです。正直、何が起きているのか分からないのです……。

――ニント

この正体不明の邪悪な断崖絶壁以外、住めるところは、ない。

――フェール

アヴァロン風物詩

家畜

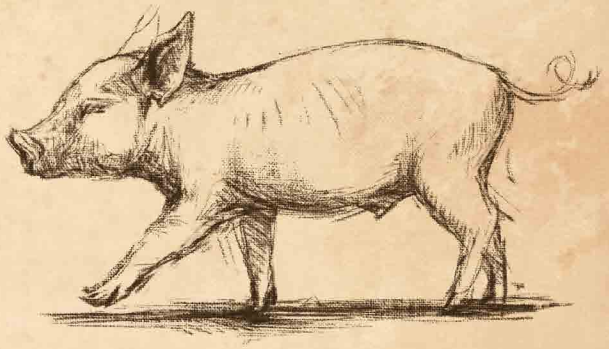
優れた耐久力を誇る荷駄やロバは、旅の友として最適だ。豚に乗ろうと試みた氏族もいたが、うまくいかなかった。

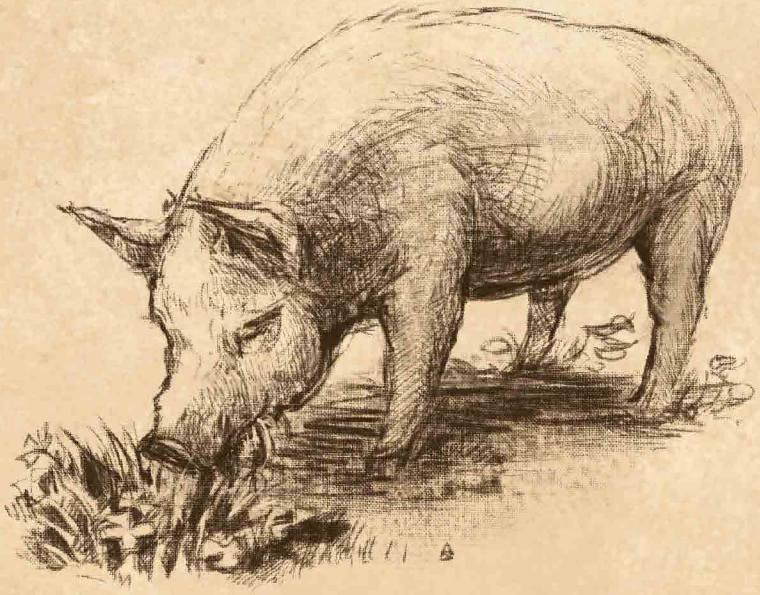
カマアロの騎士と兵士たちが、ほとんどの馬を接収しているのだ。この島の民草には、ロバとラバしか与えられていない。

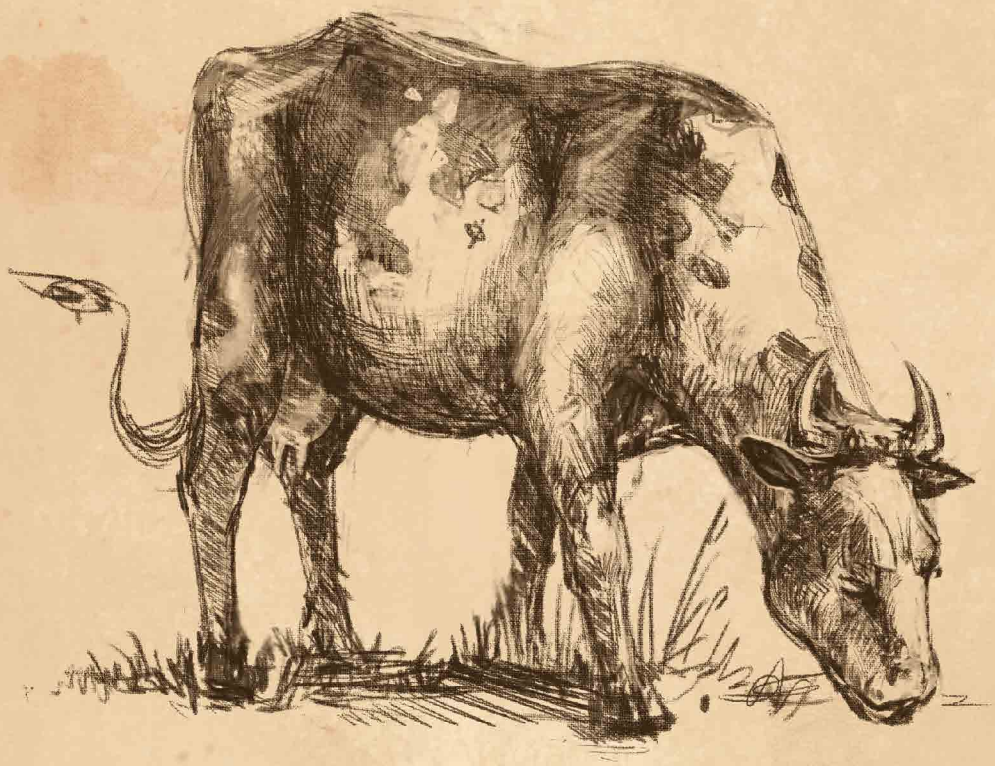
——イウェイン

本土では、役立たずの犬、怠惰な猫、またはよく知らぬサルという小動物が、ペットとして飼われていたなり。われらは本土の先祖とは違い、現実的かつ賢明なるため、何の成果もあげられずとも、アナグマを飼いならすべく何年も頑張っているぞよ。

——オベール







ハンノキ

この常秋の時代、ハンノキの奇妙な話を聞いた。この木は、四季の全てに同時に存在する、と。どうしてかは分からん。

——フェール

すべては全母の思し召しですわ……。

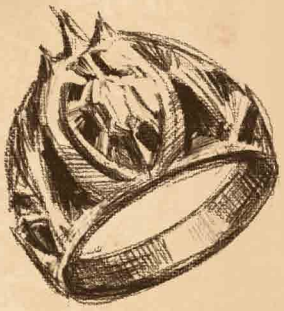
——ネント

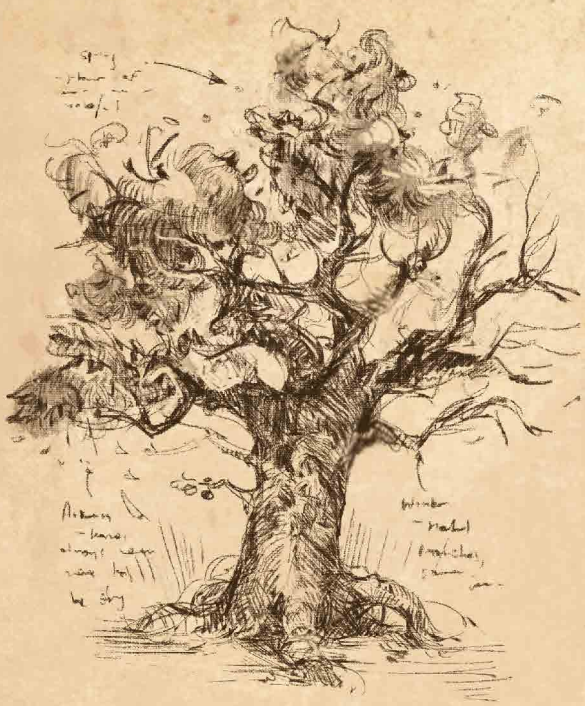
魔法の道具

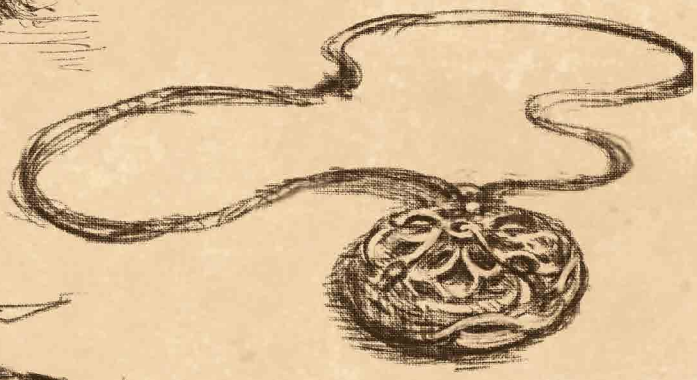
島には多くのドルイドと全母の司祭がいるが、ほとんどの「魔法」の出どころは、それ以外にある。才能ある魔女は、魔力を秘めた道具を作れるというのだ。

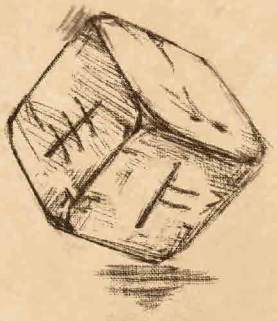
効果があると思うかと？　われは信じるなり。かつて読みし巻物なぞ、純粋の影を生み出したなり。気がついたときには、徒歩で二日ばかりかかる場所にいたぞよ。

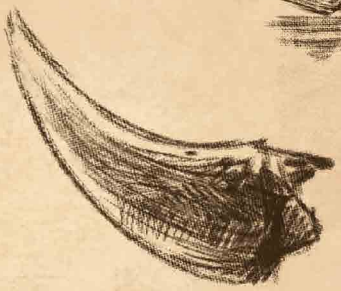
——オベール











鎧

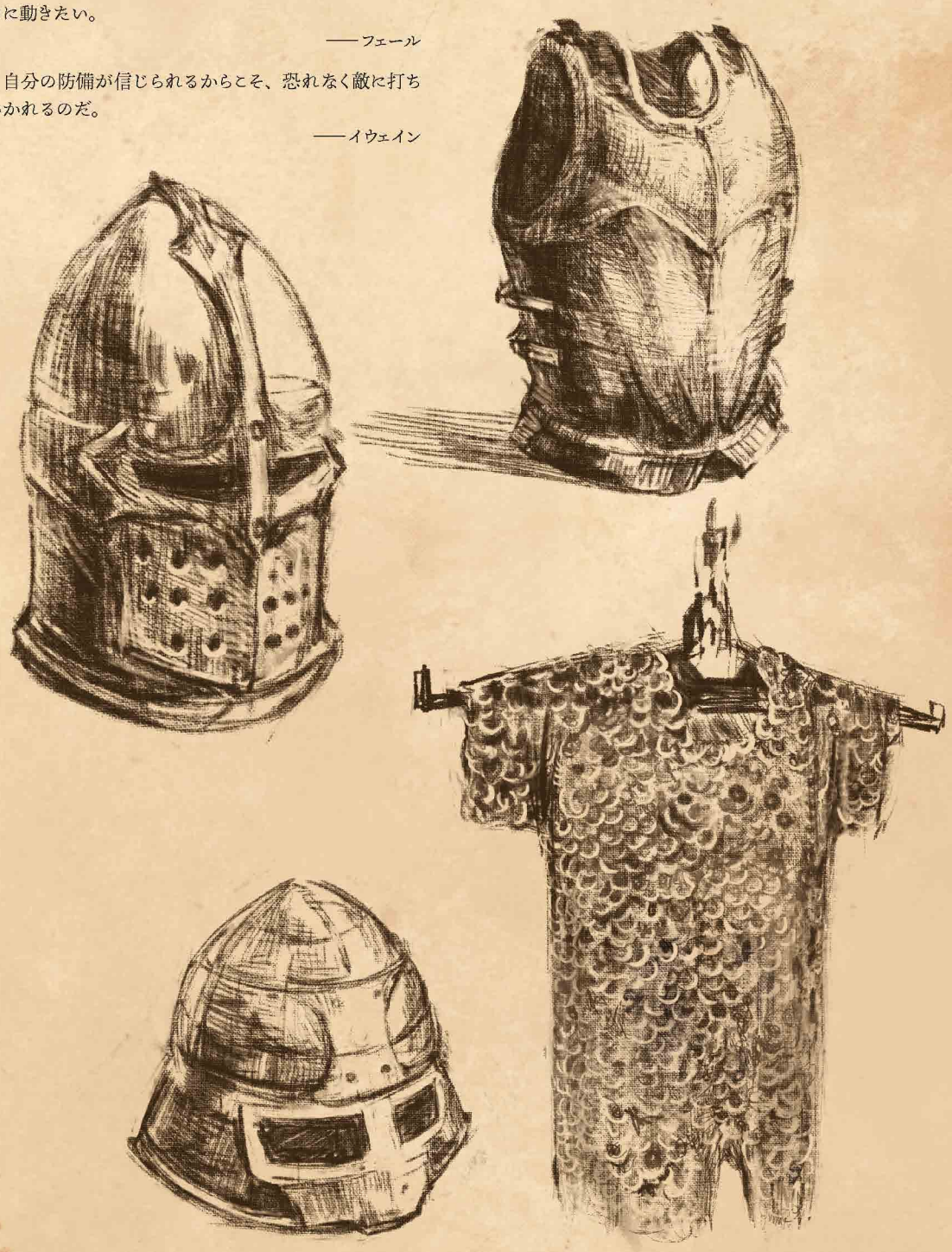
鎧造りは、本土から持ち込んだ道具、知識、技術に依存している。

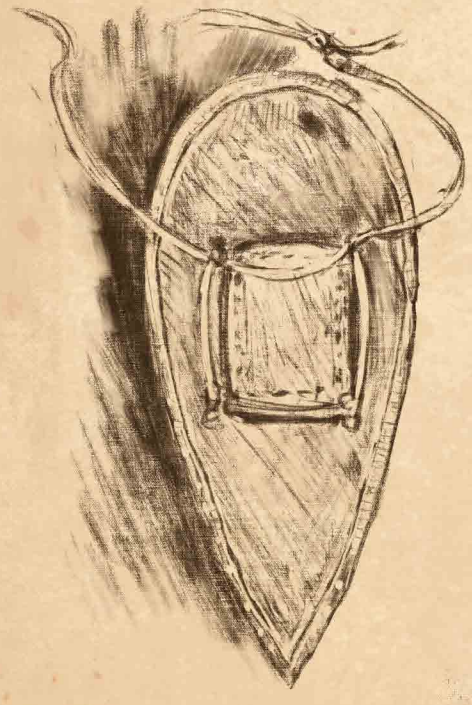
鎧か! 役に立つが、おれには重すぎる。おれは、自由に動きたい。

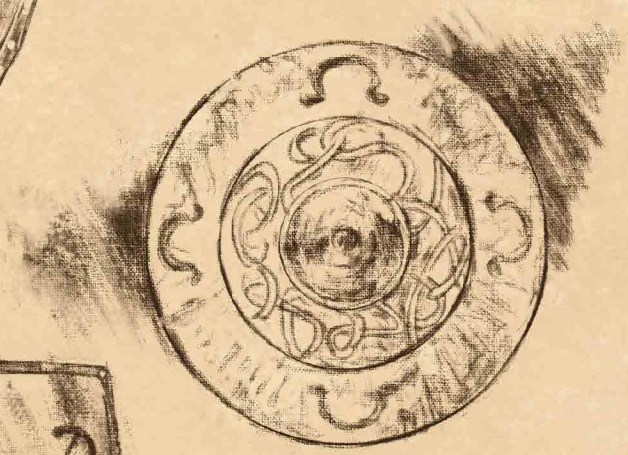
――フェール

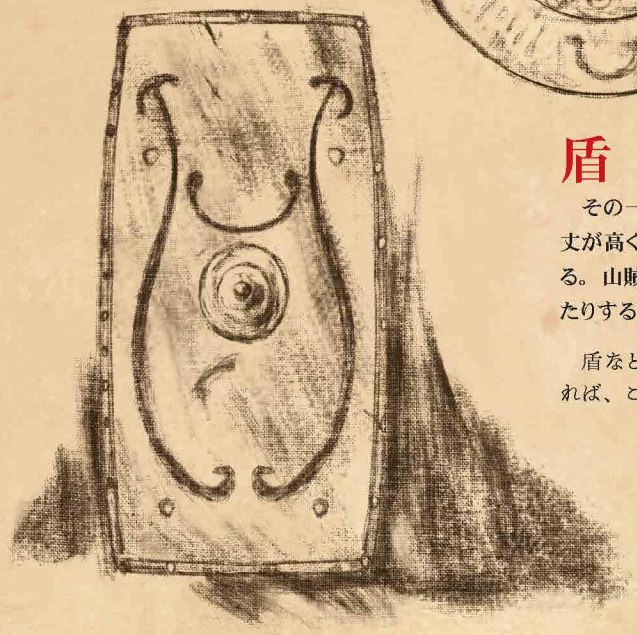
自分の防備が信じられるからこそ、恐れなく敵に打ちかかれるのだ。

――イウェイン









盾

その一方で盾の制作には、さまざまな仕様がある。丈が高く広い凧型盾（カイトシールド）は、主に完全武装の騎士が用いる。山賊や狩人は、木や枝から急場しのぎの盾を作ったりする。

盾など無用の長物なり。逆の手に短剣を構えさえすれば、ことたりるぞよ。

——オベール

クラノグ 人工島

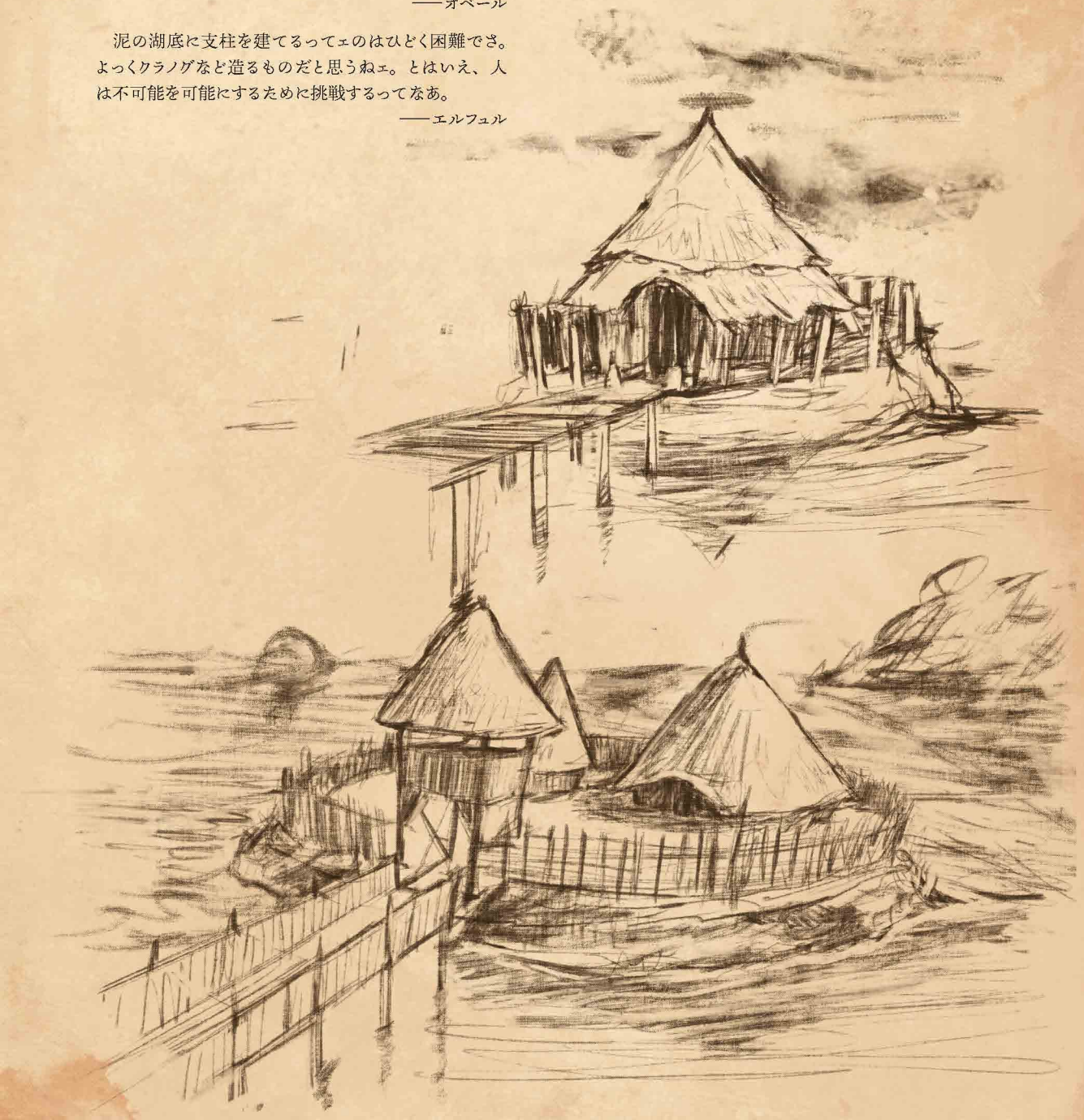
アヴァロンの多くの人々は、石壁や木の柵を建てる代わりに、湖や沼の上にクラノグを造って暮らすことを選んだ。

純粋なあやかしの力の上に造られたクラノグがある、というのは根も葉もない噂なり。ほうぼう旅して回ったが、そんなもの見たことないぞよ。

——オベール

泥の湖底に支柱を建てるってェのはひどく困難でさ。よっくクラノグなど造るものだと思うねェ。とはいえ、人は不可能を可能にするために挑戦するってなあ。

——エルフュル



再生の釜

別名ベイル・ダデニ。本土から持ちこまれた強力な聖遺物のひとつで、死者を甦えらせる力がある。伝説の時代が終わりを告げると、いずこへともなく姿を消した。

この聖遺物を"悪"と決めつけるのは、ひどいでしょう。でも、危険ではあるのです。薬草採取のための銀の鎌で、人を殺めることだってできるのですから……。

――ニント

赤死病がクーナハトを襲ったとき、手元にこの大釜が欲しかった。なかったものは仕様がないし、今更それを言っても始まらぬ。とにかく、前を向いて進まなくては。

――イウェイン

護符

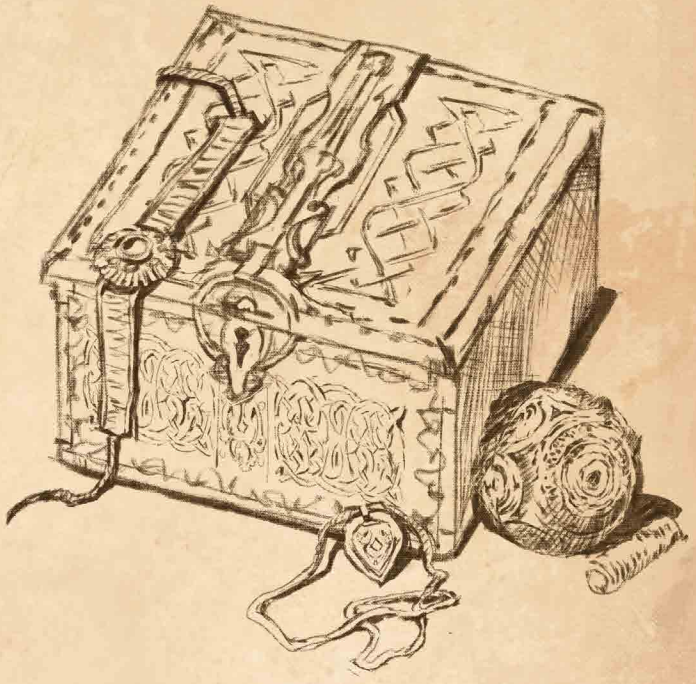
アヴァロンの人々は幸運のお守りがとても好きで、実際に効果があると信じている。

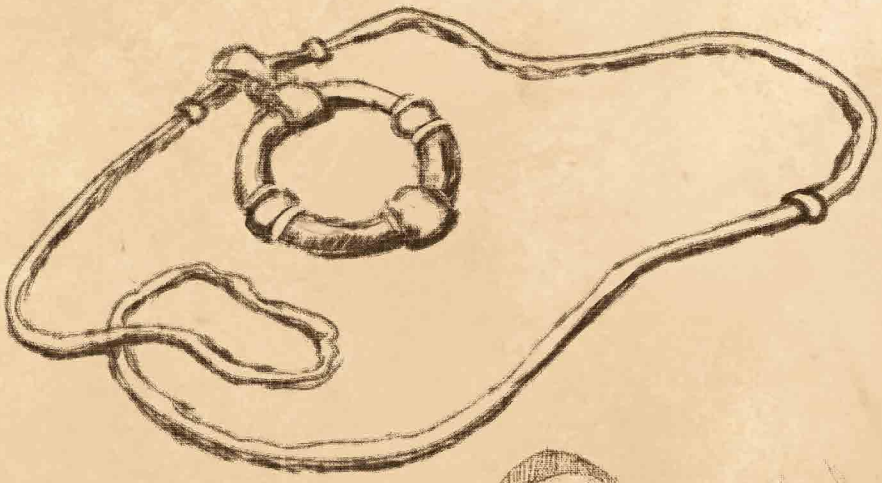
迷信は信じません、と言いたいのですけれど……全母の涙の小瓶を常に携帯しているゆえ、言行不一致になってしまいますものね。

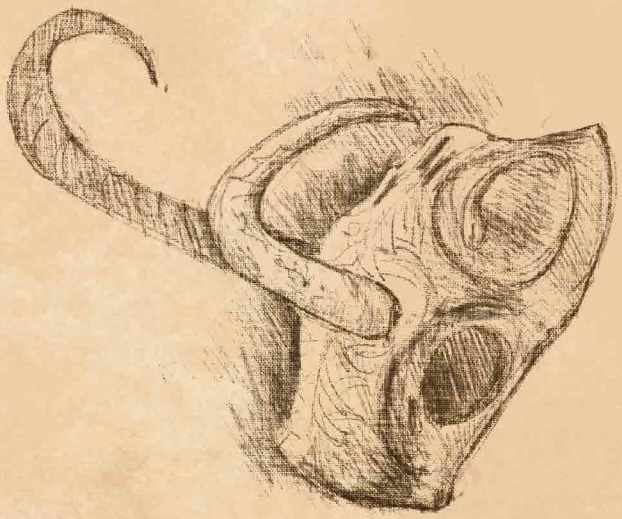
――ニント

この磨きあげた琥珀の欠片なかりせば、われはもう何回も死しておるぞよ。

――オベール







干し首

多くの伝説の戦士たちは、斬った敵の首を洗浄し、乾燥させ、身の毛もよだつ助言者として仕上げた。

からすのねぐら（クロウズ・ネスト）には、連中の女神の首があるという話なり。だがそは確かではなく、さらに、それを訊ねただけで、一週間も収監されたぞよ。

——オベール

悪いことに、本土からアヴァロンにやってきたのは、文明人だけではない。血に飢えた多くの部族も、同様に到来したのだ。その野蛮な風習も、今に至るまで生き残っている。

——イウェイン

石門（ドルメン）

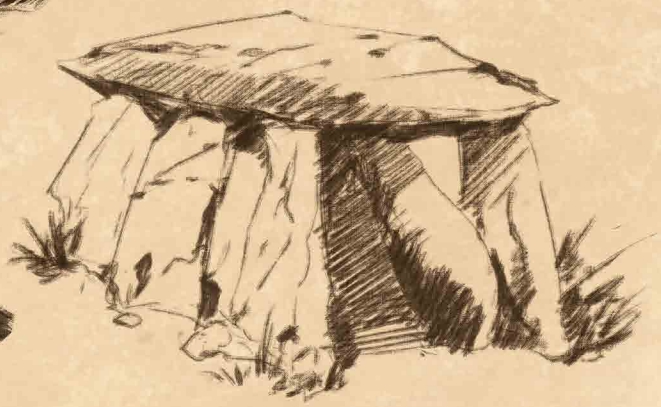
アヴァロンの環状列石の多くは人間が造ったものだが、ドルメンの多くは巨人がひとりで仕上げたものだ。巨人の家と思われがちだが、この巨石建造物から発せられる奇妙なオーラは、他の目的を示唆している。

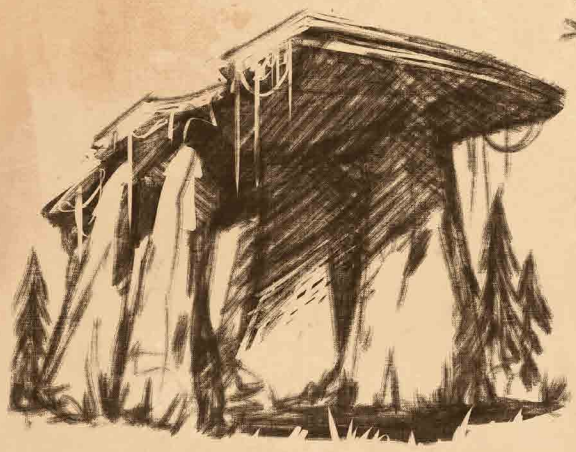
ケッ、血迷ったとしか思えんな……こいつの下に居を構える者がおるとは。

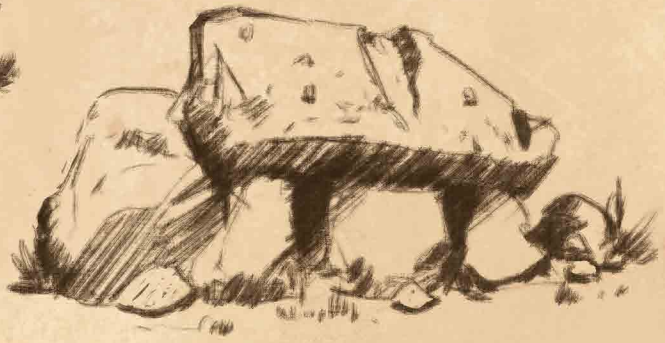
――エルフュル

天辺に登って周りを眺めるには、最適だ。だが、下に潜るのはどうかな。別に怖がっているわけじゃあないが。

――フェール





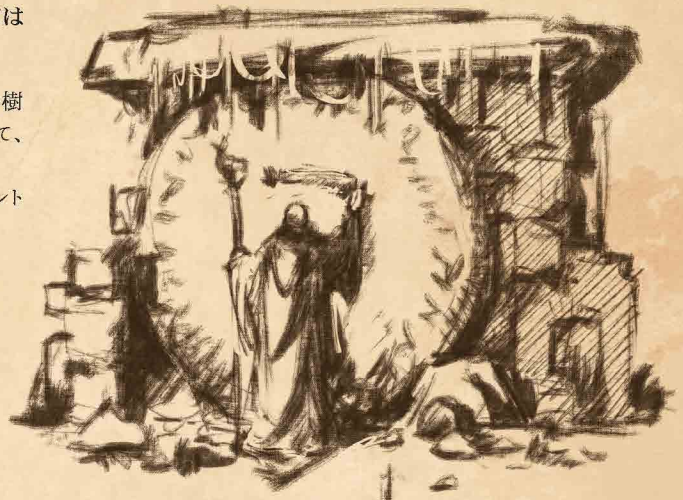


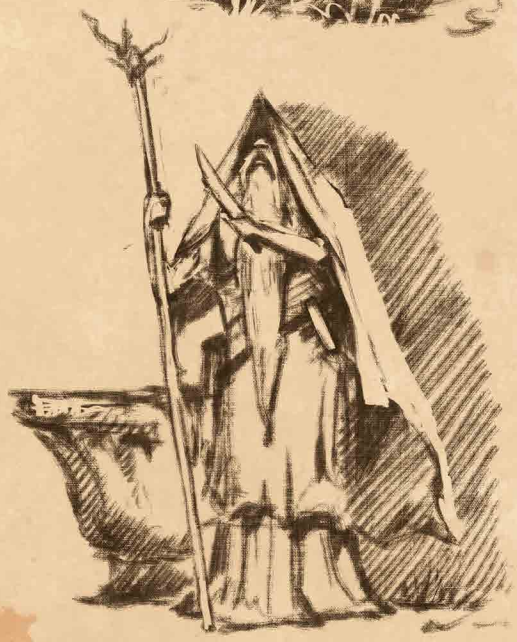
ドルイド

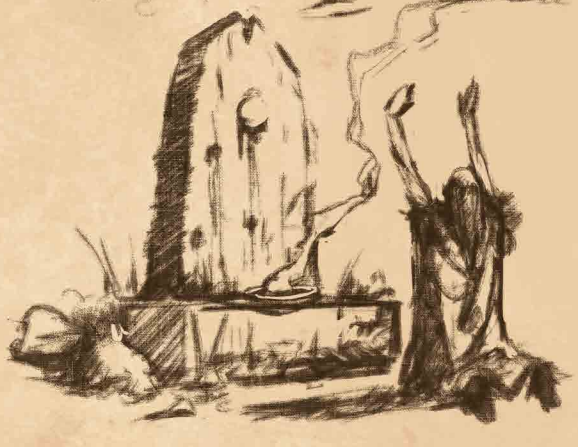
どこか隠者のようなドルイドについては、誰も多くは知らない。

信用しないほうがいいですわ……彼らは、聖なる樹木や岩石に対して余りにも多くの時間を費やし過ぎて、人々にかまけている暇がないのですから。

——ニント







留め具（フィブラ）

何を贈ればいいかわからないときは、フィブラを贈ればいい、という言い回しがある。

とても便利で素敵な装身具なり。本質的には、外套を留めるためのブローチぞよ。これらの値踏みは勘弁なり。われは1ダースだけ、所持しているぞよ。

――オベール

自分で作れるんなら、食うに困ることはないねェ。

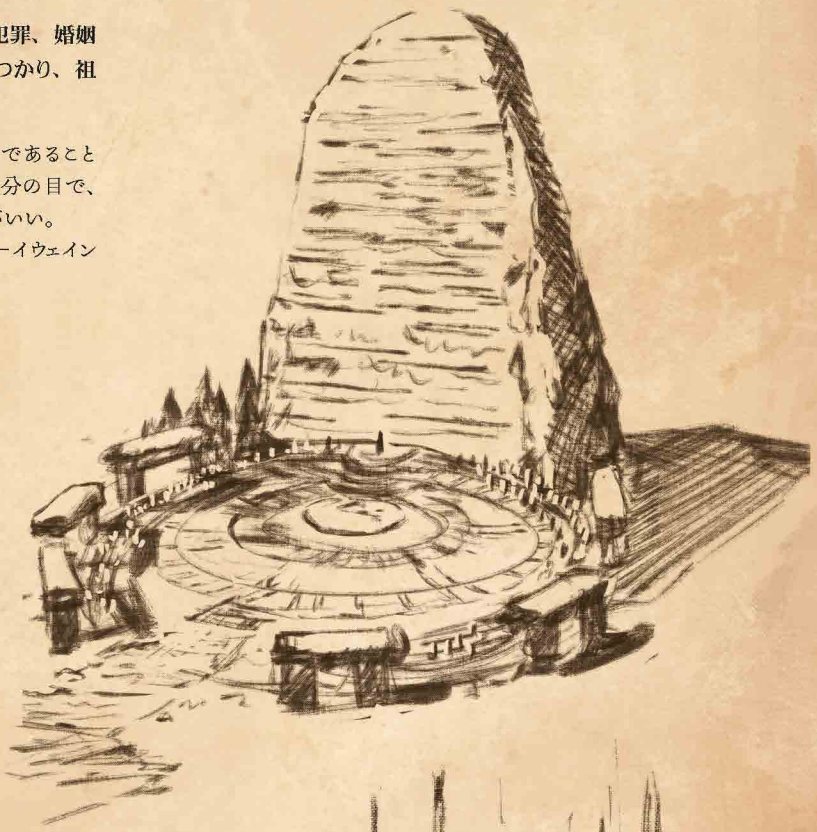
――エルフュル

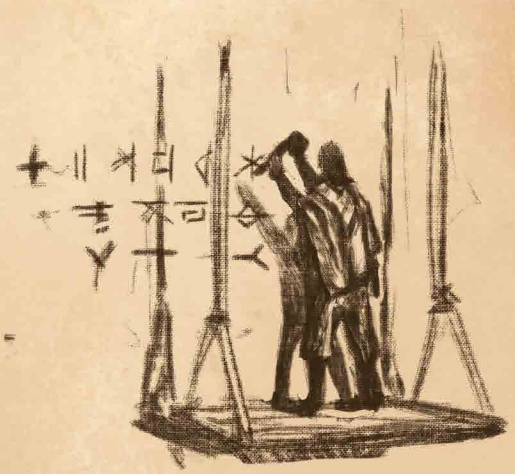
グラッジストーン
遺恨碑

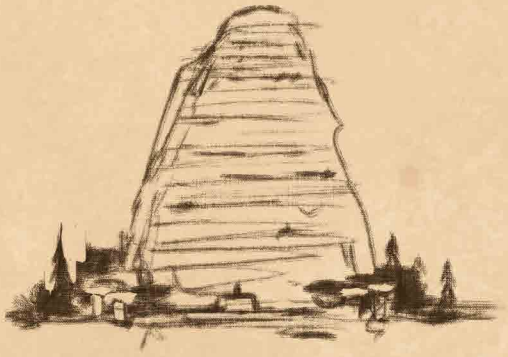
島のへその巨石には、ほとんどの取引、犯罪、婚姻が刻まれている。読めば価値ある情報が見つかり、祖先のことを知ることもできる。

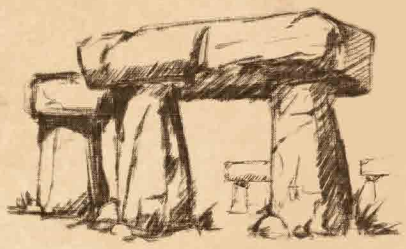
私が、生まれながらにクーナハトの所有者であることを疑う者があるのなら、島のへそまで行き、自分の目で、あの黒い岩に刻まれた文言を確かめてみるがいい。

——イウェイン









立石（メンヒル）と先住者の遺物

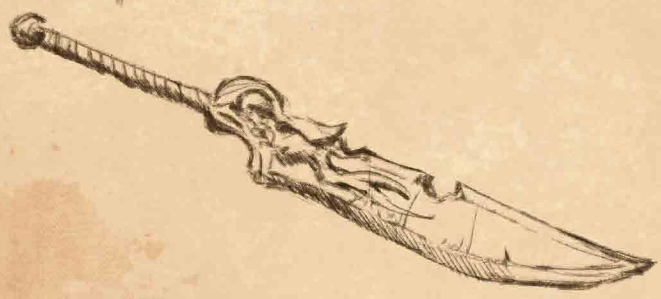
メンヒルについては、さまざまな憶測がある。ただひとつ確かなことは、あやかしから人々を守るために、アーサーがそれを起こしたということだ。

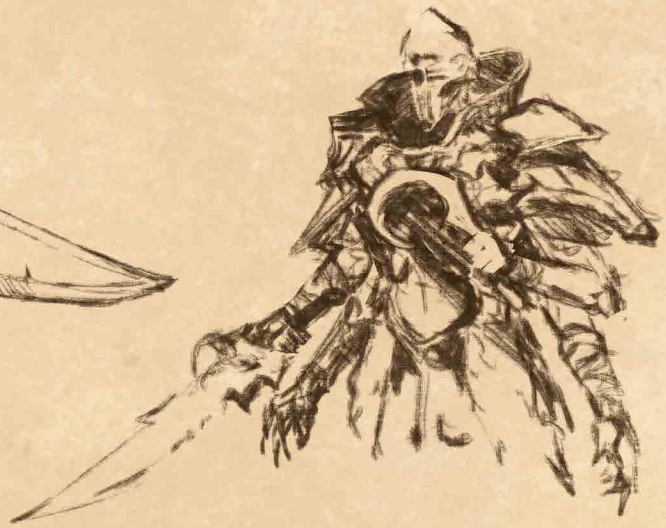
あたくしは、メンヒル関する知識があるドルイドを、常にうらやましく思っています。それがあたくしたちを守ってくれることは知っていますが、その方法や理屈については何も知りません。

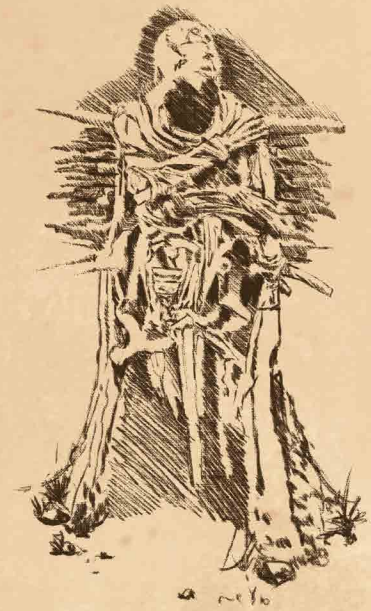
——ニント

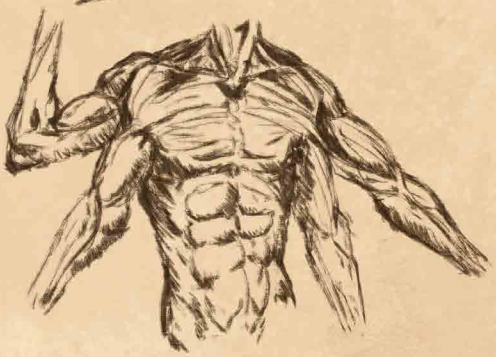
見ていると落ち着かない気分になるなり。けだし同時に、近くにいるとより安全だという感覚もあるぞよ。

——オベール









傭兵

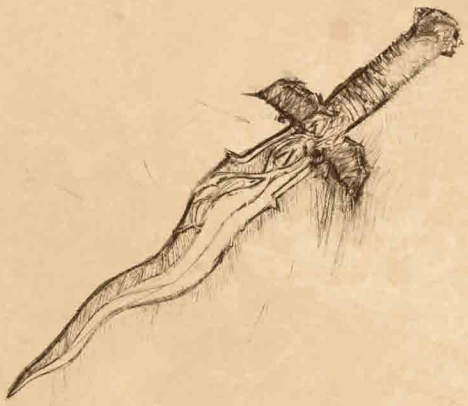
街道は、仕事を探す戦士たちであふれている。ときに大きな部隊や、さらに大きな戦闘団を結成することもある。

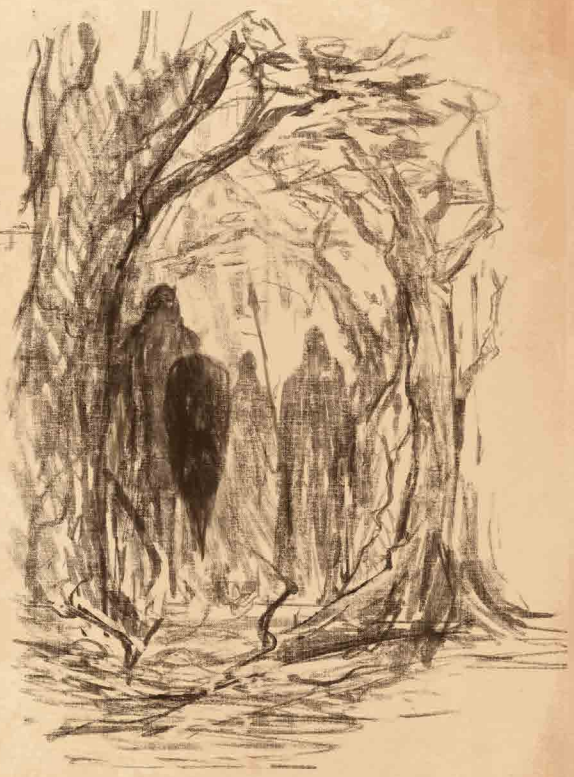
ああ、もちろん金儲けのためさ。きゃつらは問題解決のために雇われるが、さらに問題を大きくしたりもするのだよ。

――イウェイン

信用できんヤツらだ。カネのために戦争、小金のために人を殺めると。

――フェール





商人と旅人

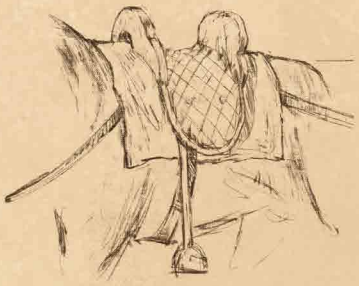
一般の人々も、ときには家を出て、行くべき道を選ぶことがある。

メイドや羊飼いだった人たちと一緒に、旅をしたことがありますよ。みな役に立つ技能の習得者であることに、驚かされましたわ……。

——ニント

民草は、みな生まれ故郷に留まるべきだ。大地を耕すこととそが、その務めなのだよ。

——イウェイン



神話と伝説

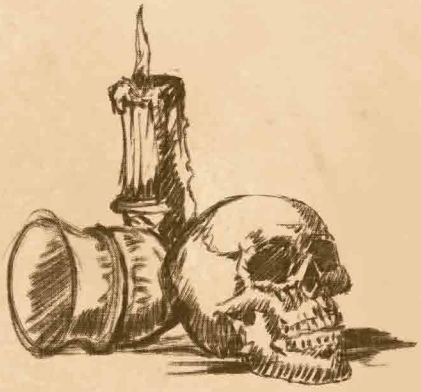
この島およびその歴史は、さまざまな伝説で彩られている。なかでも有名なものが、聖杯と聖剣エクスカリバーである。

アーサーは、ときに生身の人間とされ、ときに奇妙な装飾的な甲冑をまとった巨漢とされるなり。その理由は、われには分からないぞよ。

――オベール

我らが王か。その真の偉業か……話せん。誰にも教えないと誓った。

――フェール



赤死病

我らは赤死病より逃れるために、本土よりこの島に来た。されど疫病のほうが足が速かった。

流され島なぞ行ってはいけないなり。すぐさま感染するべし。症状が出たとたん、ただちに隔離されるぞよ。実験材料になるかもしれぬ。死んだ方がマシと思うようになるぞよ。

――オベール

施設の修道士たちは、業病の蔓延を防ごうと、できる限りのことをしている。症状が出たら、すぐに行け。

――イウェイン

宗教

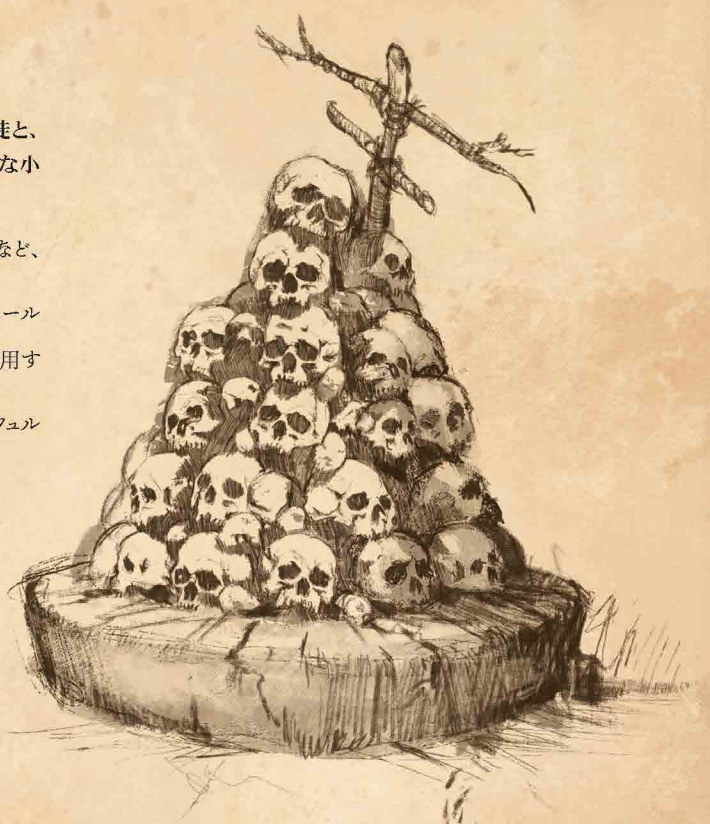
最も一般的なのが全母教。その次が鹿の父の徒と、ドルイドの教えである。それら以外にも、さまざまな小さな宗派がある。

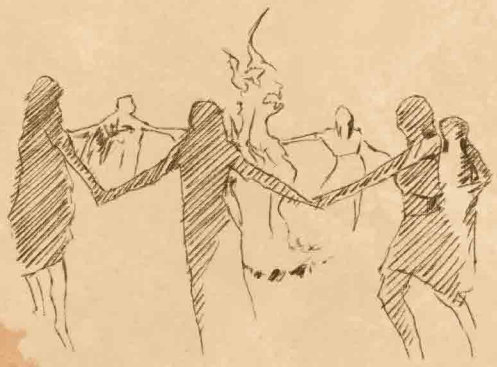
全母は、最悪のときに助けてくれる。人の生け贄など、必要ない。

——フェール

アっしは、出来の良い鎧の防護効果のほうを信用するねェ。とはいえ、祈って悪いわけもないけどねェ。

——エルフュル





円卓

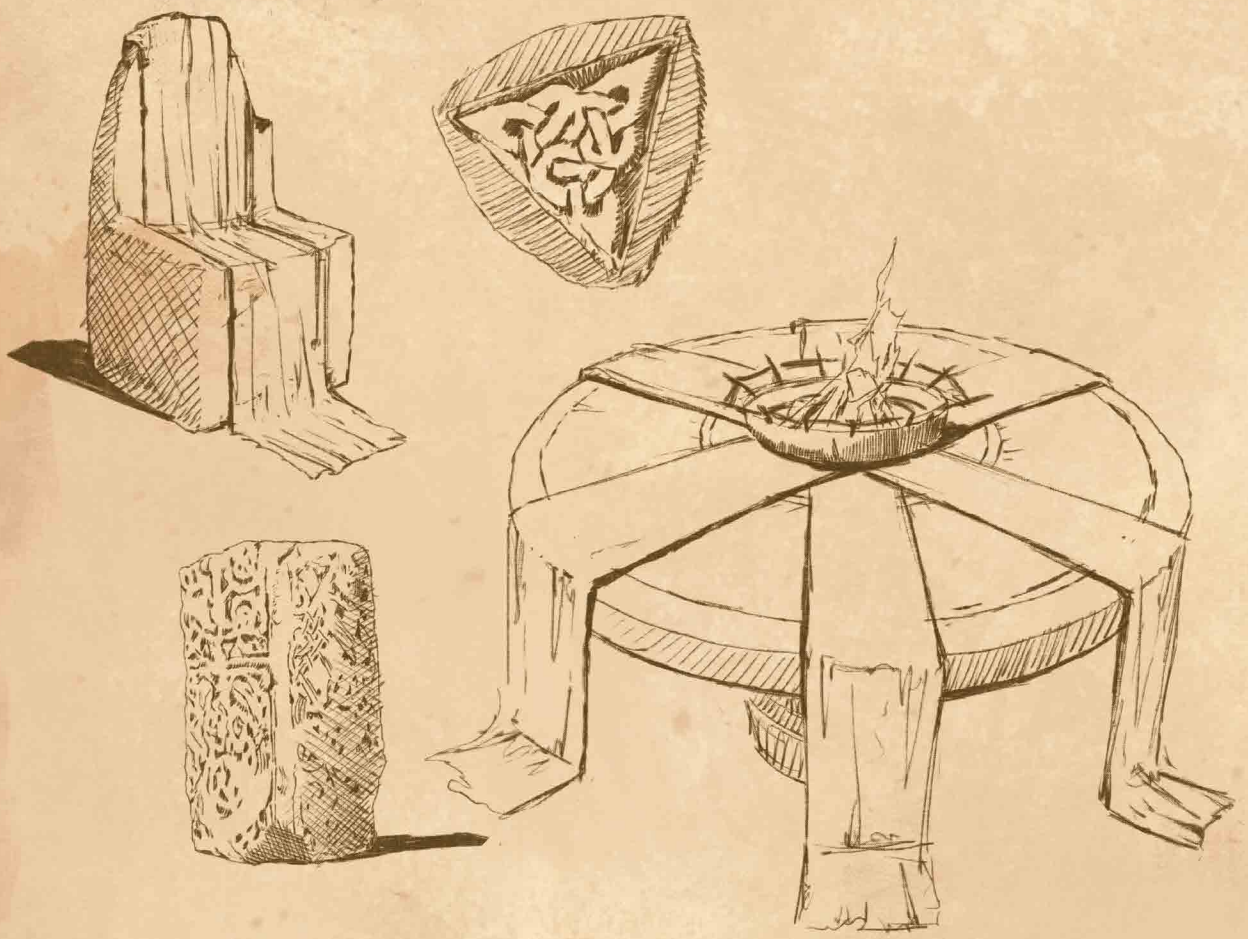
六百年前、アーサーによって造られた。現在でも騎士たちは王国に仕えているが、数も力も優れているとは言いがたい。

残念だ。円卓のやつらを騎士だと思っている輩の、実に多いことか。クズどもなのに。

――フェール

向こうには金があり、アっしには腕がある。あいつらがいなかったら、あれほど多くの剣や盾は造れなかったさね。

――エルフェル



民間療法

ランタナガマズミ、三眼茸、そのほか色々……アヴァロンの植生は、強力な薬効の植物に溢れている。

その多くには幻覚作用があるぞよ。

――オベール

自然を知れば、飢えも病気もない。

――フェール

熟練の錬金術師とか本草学者なら、強力な効能を抽出できるってな。アっしも一度、治癒薬を蒸留したことがあるのよ。で、それで傷ついた孤児を救うことができたってわけさ。

――エルフュル

司祭が本草学や錬金術に通じていないのは、悲しいことです……強力な飲み薬や軟膏で祈りを補うことができるのなら、きっとよりよき世界になるでしょう。

――ニント

武器庫

この島で一般的な武器といえば、槍、棍棒、手斧だ。

狩りに行くなら槍だ。怒り狂った猪とかが相手なら、命拾いする。ないと後悔する。

――フェール

手斧の用途は多彩なり。便利で素晴らしい道具なり。戦闘以外でも、自分の命を救ってくれるぞよ。

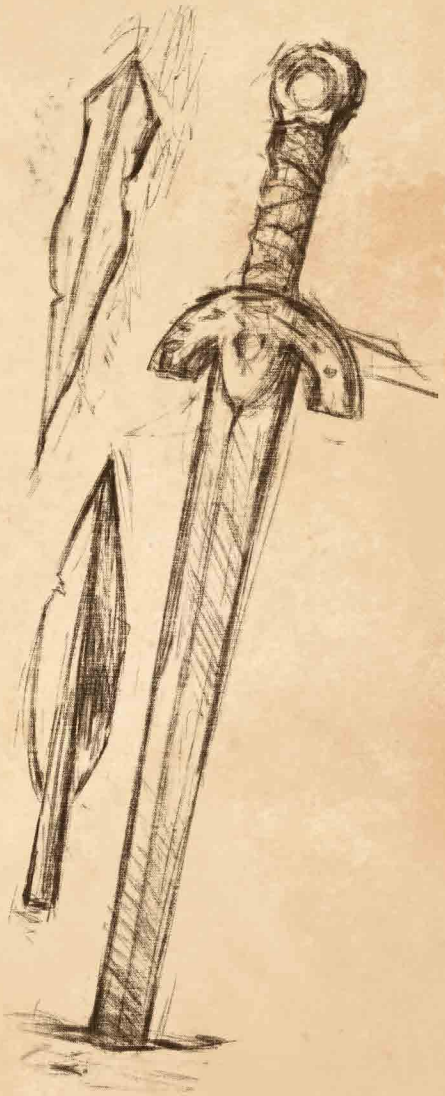
――オベール

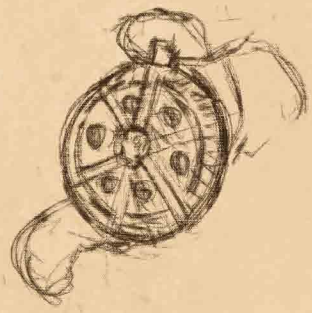
剣と戦斧は、騎士か裕福な傭兵がほぼ独占している。剣など誰が必要だ？　遠距離から撃てるのに。

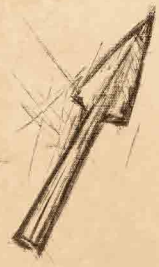
――フェール

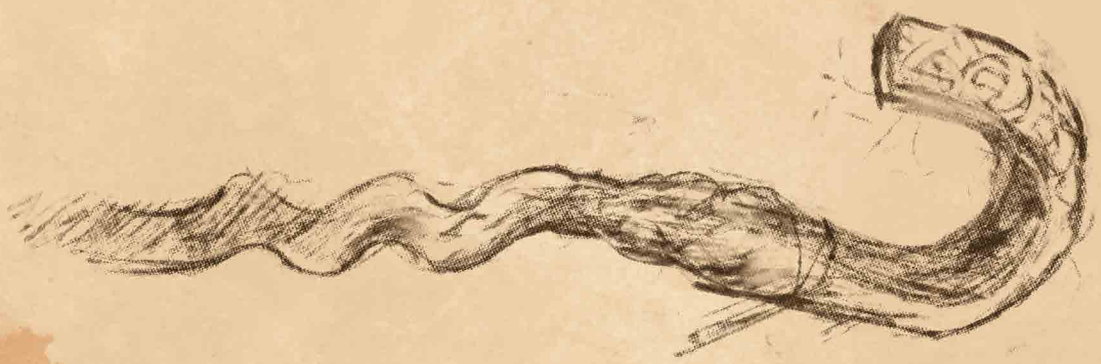
剣は熟練を要する。されど一度習得したならば、戦場では指揮を任され、裕福ならざる戦士たちからは、畏敬される存在となろう。

――イウェイン









あやかし

あやかしとは純粋な変化の力で、触れるもの全てを変化させる。人間が最初にアヴァロンを訪れた時、あやかしはほぼ全土を覆っていた。アーサーとマーリンは、その排除に全力を尽くしたが、為しえていない。

人々は、あやかしと先住者のあいだには何らかのつながりがあると思っていたが、一部の専門家はそれを真っ向から否定している。あやかしは、先住者がこの島に来る前から、存在していたというのだ。確実なことはふたつ……メンヒルはあやかしを寄せつけない。そして人々は、あやかしから可能な限り離れているべきなのだ。

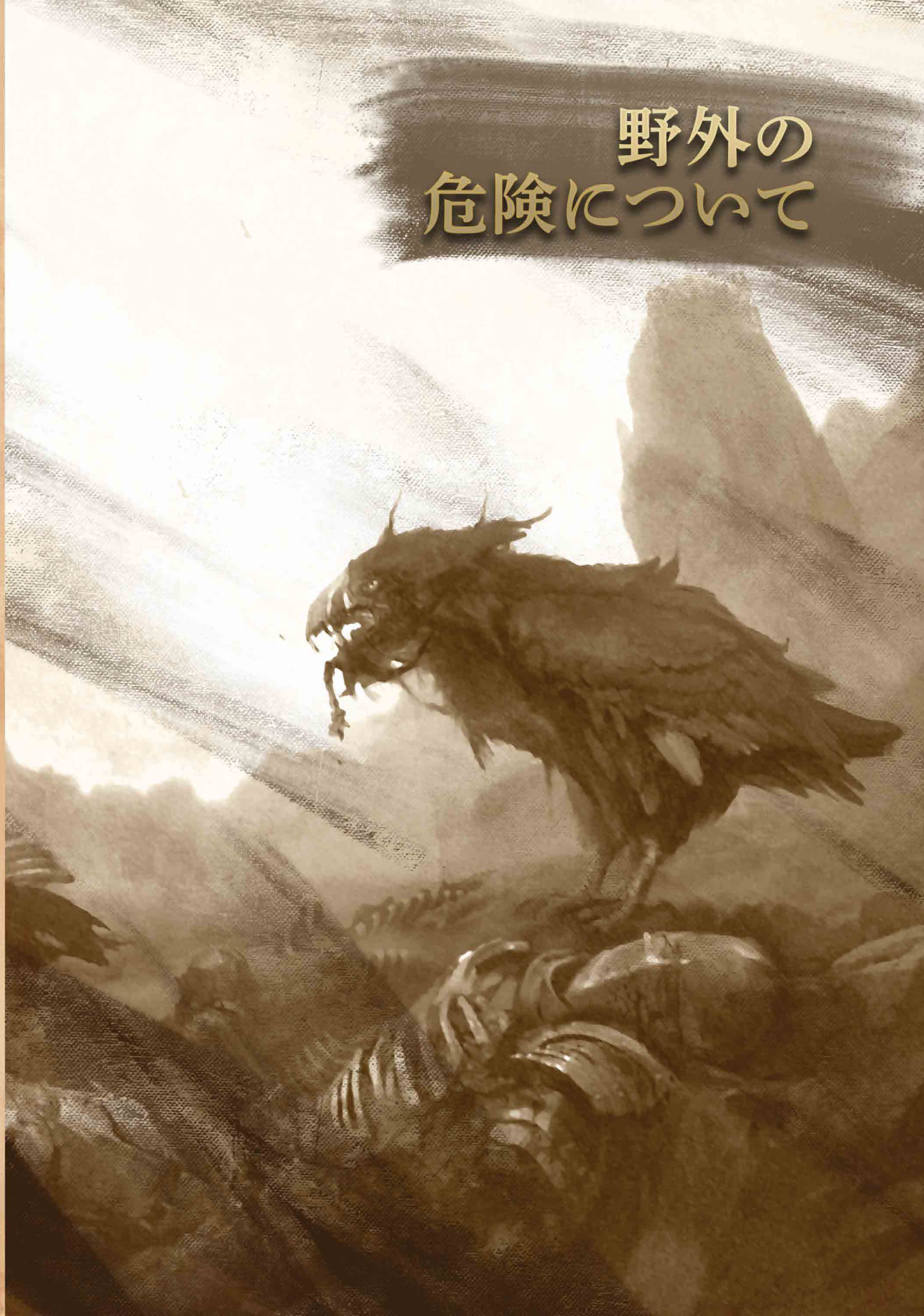
旅では、メンヒルからあまり離れてはダメだ。あやかしが放つのは、歪んだ獣ばかりではない。通い慣れた道が、目の前で変化するのを見たことがある。

——フェール

壁を高くするだけであやかしを防ぐことができるなら、どんなにいいことか！　何か方法が見つかるまでは、古く色あせた魔法に頼るしかないのだよ。

——イウェイン

野外の危険について



アヴァルサッハ

邪悪な笑みを浮かべた下品な小男。土地の一部であるため、殺すことができない。

ミルクが酸っぱくなるのは、かれの小便のせいなり。

——オベール

沼の乙女

この屍者と赤死病の関連について解き明かそうと、一部の学者たちは躍起になっている。

歩く死体ぞな？かほど怖気を振るうものはあるまいて。

——オベール

屍者を寝かしつけるのは、常にあたしたちの責務でした。これは最近では、かなり手間のかかるきつい仕事になってしまいましたわね……。

——ニント

あやかしの児ら

あやかしの力は、多くの恐怖の元を生み出した。それはしばしば、本土から持ちこまれた怪談の内容と合致しているのだ。

かれらの傍で耳を澄ますと、自分の死に場所と死期が、いつか聞こえてくるというぞよ。

――オベール

埋葬塚には近寄るな。中から這い出るやつらもいる。

――フェール

多くの不幸な事件の後、私たちは遺体を荼毘に付すことを学んだのだ。

――イウェイン

妊婦にあやかしの力が及ぶと、世にも恐ろしき結果となりますのよ……。

――ニント

これまで見てきたなかで、最悪の光景だったなり。影のような何者かが、戦士の死肉を、赤ん坊に与えていたぞよ。

――オベール

ザルフー

このカワウソの王は、喉の渇きを癒すために、川辺に膝まづいた旅人を餌食にするという。

みなに誓うなり。われはこれを、一度見たことがあるぞよ。

——オベール

人々は未知なるものに、自身の恐怖や失敗を投影するのだ。だから、ザルフーなど、カワウソに驚いた酔っ払いの産物なのだろう。

——イウェイン

妖精（フェ）

妖精が棲む、目には見えないもうひとつの島があるという。そして夏至や冬至のあいだ、ふたつの世界は交叉する。

あやかしに由来するものではありませんが、これは同じように危険に見えます……。

——ニント

フェは麗しく恐ろしい。出会ったときには、すぐ逃げろ。

——フェール

フェッチ

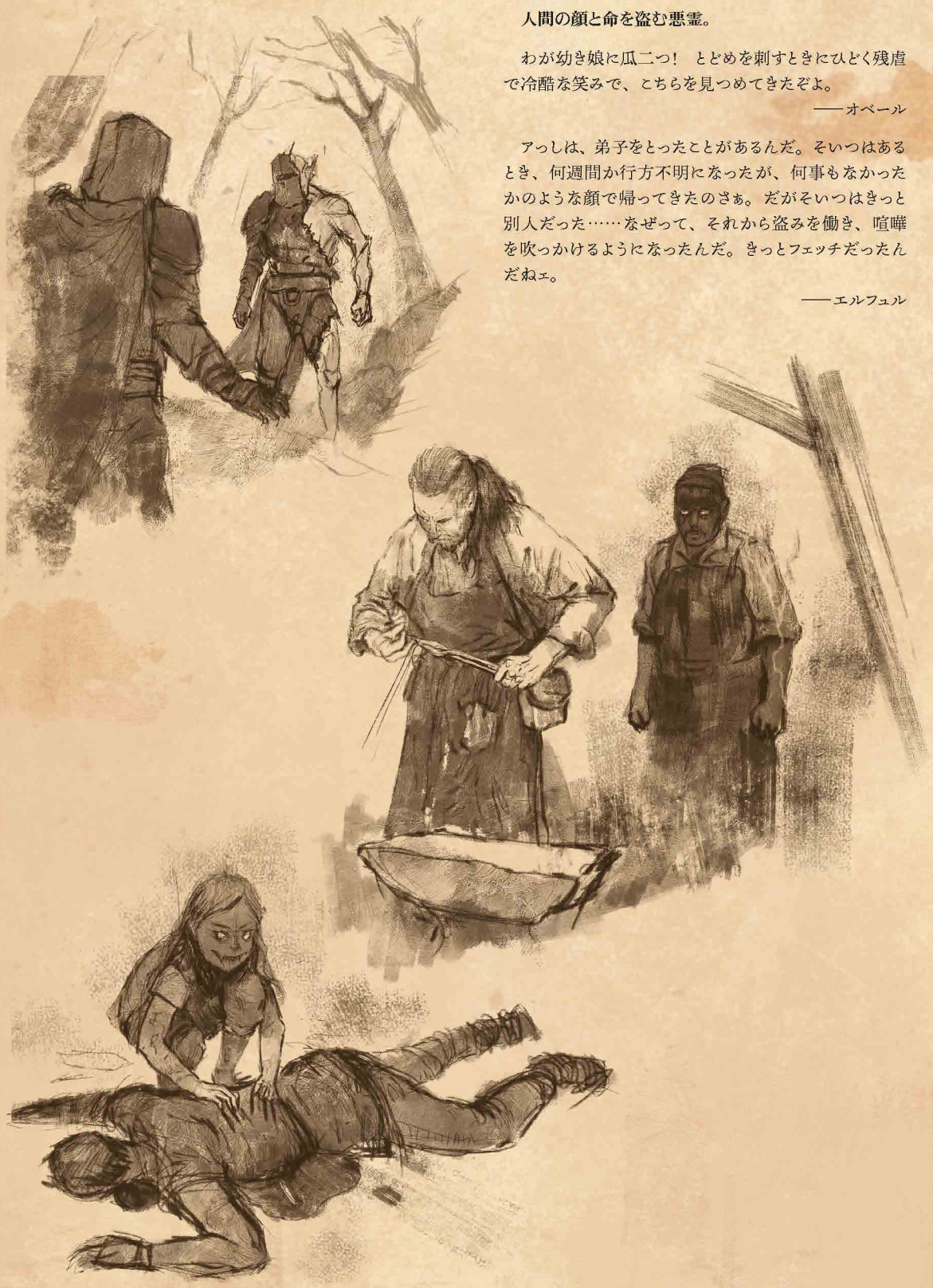
人間の顔と命を盗む悪霊。

わが幼き娘に瓜二つ！　とどめを刺すときにひどく残虐で冷酷な笑みで、こちらを見つめてきたぞよ。

――オベール

アっしは、弟子をとったことがあるんだ。そいつはあるとき、何週間か行方不明になったが、何事もなかったかのような顔で帰ってきたのさぁ。だがそいつはきっと別人だった……なぜって、それから盗みを働き、喧嘩を吹っかけるようになったんだ。きっとフェッチだったんだねェ。

――エルフュル



屍鬼

血と恐怖を糧にする存在。

戦えば戦うほど、そいつは強くなった。おれは結局逃げたが、罠に誘いこんで倒した。

——フェール

先住者

人間の到来以前、アヴァロンに棲みついていた古えの種族。アーサーは戦って追い払い、その土地を奪った。絶滅したとされているが、今だに脅威であると考える者もいる。

「考える者」とは、長塚の愚か者のことなり。先住者は死に、今後もずっと死んだままぞよ。

――オベール

もう話ができないなんて残念だねェ。連中の鍛冶屋には、訊きたいことがタンマリある。冷酷で誉れ高かったのは知ってるが、多くの美しいものをも造りあげたってことも、事実さァ。

――エルフュル

巨人

かつての戦いで、巨人は先住者軍の最前線を形成していた。今ではそんな誉れにあずかることもない。

伝説のロビン卿もかくやという勢いで、われは逃げ出したなり。信じるべし、それこそ巨人相手に生き残るための、最良の方法のひとつぞよ。

——オベール

アっしは、あやつらの道具や武器をこの手にしたいと、いつも切望してきたんだぜ。あれらを巨大な金属塊から仕上げるには、とんでもない精密さが要求される！それをあの連中はさ、あンな手でどうやって作ったんだろうねェ……。

——エルフュル

腐樹の怪

とあるドルイドの一団は、腐った植物に悪しき魔法で命を与え、人の形を与えることに成功した。

最初は、奇怪な木の彫刻に見えた。なのに突然、動き出した。

――フェール

魔法で生と死をもてあそんではいけないという、いい例なのです。いつだってそれは、ひどい失敗で幕を下ろすのですわ……。

――ニント

プーカ

さまざまな動物の姿をした自然精霊。ときに死を、ときに幸運をもたらす。

森で、乾きで死にそうになった。山羊が来て、乳をくれた。そいつが悪霊や精霊でも、全母その人でも、かまわない。

——フェール

クーナハトから離れて旅をするとねェ、プーカどもが来て、アっしの道具を片っ端から盗んでいきやがるんでェ。

——エルフュル

セルキー

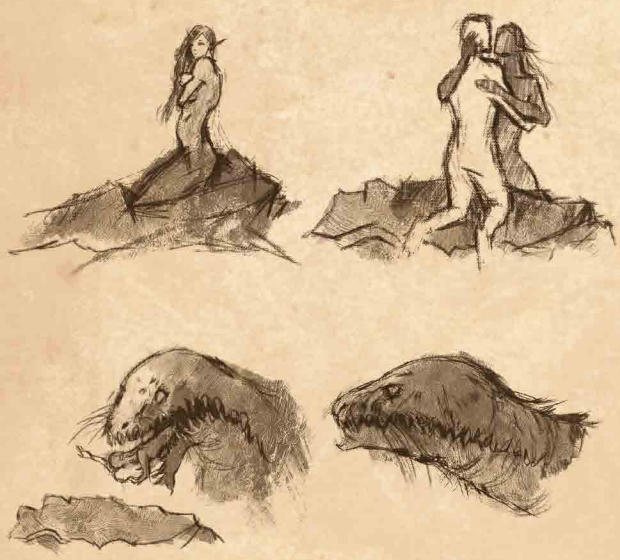
多くの物語で、人間を巣までおびき寄せるために、海辺付近に潜んでいると記録されている。

アザラシの皮をかぶった乙女、乙女の皮をかぶったアザラシ。どちらにしてもバカげてるぞよ。だいたい、海で声をかけてくる女は信用ならないなり。

——オベール

興味深いことに、多くの伝説の怪物は魅惑的な女性の形態をとり、男性を破滅へと導くのです。しかしながら、あたくしの見るところでは、逆のことが多いようですわ……。

——ニント



死霊群（スルア）

呪われし死霊の軍勢が壁となり、海の波のように地上を押し寄せる。

二日酔いなら、朝靄だって化け物に見えるぞよ。

——オベール

奇妙に思われるでしょうが、あたくしはスルア、いえその概念が気に入っております……死者とかかわらないほうがいいということと、敬うことを教えてくれるからですわ。

——ニント

鹿の父の徒

鹿の父の道をたどる者は、他の人間を獲物とみなしている。

フン。この殺戮集団は、手練れで誇り高いヤツらだぜ。

――フェール

狂犬のごとく危険な存在なのだ。子供をかどわかし、殺して髑髏の神のための捧げものにする！　みな、葬るしかあるまい！

――イウェイン

ならず者と戦闘団

墓荒らし、ならず者、食いつめた傭兵、盗賊、愚連隊、牛泥棒……アヴァロンは犯罪者に溢れている。

犯罪者? 似合わない言葉だ。最低のクズどもには。

――フェール

湿度の高い日には、新しいウィッカーマンを作り、そこに犯罪者たちを積みこもう。喜んで火をつけることになるだろう。

――イウェイン

かつて、参加してたことがあるなり。かれらには斥候が必要なので、われは家族を脅されて、徴発されたぞよ。

――オベール

自分が僧侶だとか子供だとか言っても、かれらには通用しません……道中、くれぐれも警戒してくださいな。

——ニント

飢えた少年、絶望した夫、望みを失った女に出会うことがあるなり。かれら失うものが何もないものどもほど、危険なり。

——オベール

家にいて、親の仕事を継ぐべきだったのだ。外の世界に出たせいで、問題ばかり起こすようになった。

——イウェイン

野生動物

常秋が続き、メンヒルの影響が薄れ、悪天候が続いているせいで、アヴァロンでの食事は、肉が中心となっている。

弓矢か槍があれば、飢えることはない。

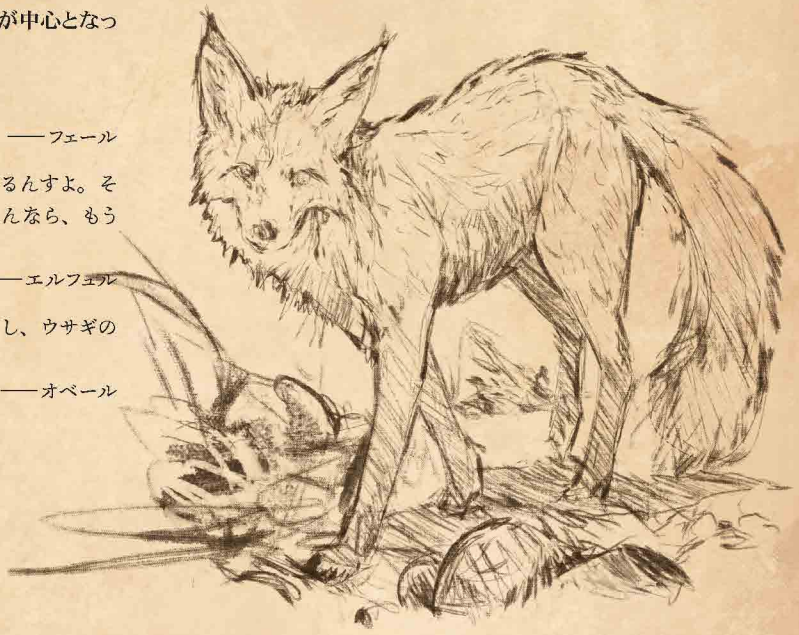
――フェール

枝角はねェ、ナイフの柄として優れているんすよ。その根元に、突進してきた鹿も丸々ついてるんなら、もうけものだっ!

――エルフェル

ツノメドリの足のグリルは最高なり。ただし、ウサギのシチューのほうがもっと旨いぞよ。

――オベール



動物を殺めるのはやめて、もっと小麦を摂れたらよいのですが……けれど穀類はもう、うまく育ちませんわね。

――ニント

唾吐きマイマイってぇヤツと、戸立て蜘蛛は、自然界で遭遇する最悪の捕食動物でっさ。食用にはならないが、向こうはこっちを食い物にするんだよねェ。

――エルフェル

年に一度、農砦は狩人を結集し、大蜘蛛その他の害獣を駆除するのだ。

――イウェイン

地竜（ワーム）

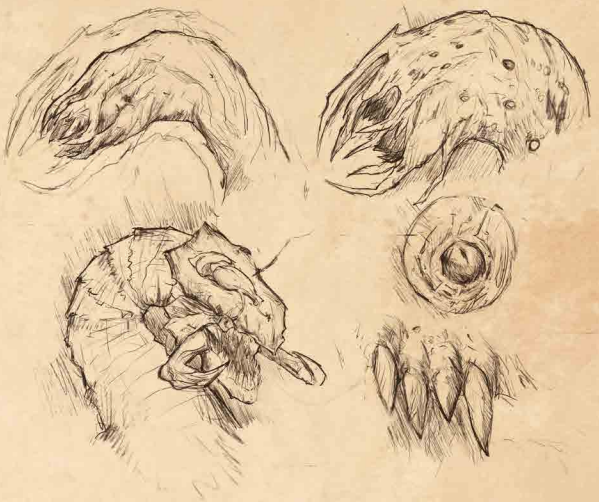
巨人や先住者と共に、この島に棲息していたが、アーサーによって根絶された。

これらが全てではない。 特に雨上がりには、その子孫が地表まで這い出て来る。

――フェール

カマアロの図書館には、この獣のスケッチが大量にありました……とてつもない大きさで、どうやって戦っていいのか見当もつきませんわ。

――ニント



CREDITS

Written by:
Andrzej Betkiewicz, Krzysztof Piskorski

Editor:
Matt Click

Proofreading:
Dan Morley

Illustrations:
Michał Peitsch, Piotr Orleański,
Jakub Kaźmierczak, Piotr Foksowicz,
Ewa Labak, Patryk Jędraszek

Graphic design:
Andrzej Półtoranos, Adrian Radziun

AWAKEN REALMS